

CA ARCserve® Backup

Client Agent ユーザ ガイド

r15



本書及び関連するソフトウェア ヘルプ プログラム(以下「本書」と総称)は、ユーザへの情報提供のみを目的とし、CA はその内容を予告なく変更、撤回することがあります。

CA の事前の書面による承諾を受けずに本書の全部または一部を複写、譲渡、複製、開示、修正、複製することはできません。本書は、CA または CA Inc. が権利を有する秘密情報であり、かつ財産的価値のある情報です。ユーザは本書を開示したり、CA とユーザとの間で別途締結される機密保持契約により許可された目的以外に使用することはできません。

上記にかかわらず、本書に記載されているソフトウェア製品に関連して社内でユーザおよび従業員が使用する場合に限り、該当するソフトウェアのライセンスを受けたユーザは、合理的な範囲内の部数の本書の複製を作成できます。ただし CA のすべての著作権表示およびその説明を各複製に添付することを条件とします。

本書のコピーを作成する上記の権利は、ソフトウェアの該当するライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、そのライセンスが終了した場合には、ユーザは CA に本書の全部または一部を複製したコピーをすべて CA に返却したか、または破棄したことを文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、CA は本書を現状有姿のまま提供し、商品性、お客様の使用目的に対する適合性、他者の権利に対する不侵害についての黙示の保証を含むいかなる保証もしません。また、本書の使用に起因し、逸失利益、投資の喪失、業務の中断、営業権の損失、データの損失を含むがそれに限らない、直接または間接のいかなる損害が発生しても、CA はユーザまたは第三者に対し責任を負いません。CA がかかる損害の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本書に記載されたソフトウェア製品は、該当するライセンス契約書に従い使用されるものであり、該当するライセンス契約書はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本書の制作者は CA および CA Inc. です。

「制限された権利」のもとでの提供:アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212、52.227-14 及び 52.227-19(c)(1)及び(2)、ならびに DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

Copyright © 2010 CA. All rights reserved. 本書に記載された全ての商標、商号、サービスマークおよびロゴは、それぞれ各社に帰属します。

CA 製品リファレンス

このマニュアルが参照している CA の製品は以下のとおりです。

- BrightStor® Enterprise Backup
- CA Antivirus
- CA ARCserve® Assured Recovery™
- CA ARCserve® Backup Agent for Advantage™ Ingres®
- CA ARCserve® Backup Agent for Novell Open Enterprise Server for Linux
- CA ARCserve® Backup Agent for Open Files on NetWare
- CA ARCserve® Backup Agent for Open Files on Windows
- CA ARCserve® Backup Client Agent for FreeBSD
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Linux
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Mainframe Linux
- CA ARCserve® Backup Client Agent for NetWare
- CA ARCserve® Backup Client Agent for UNIX
- CA ARCserve® Backup Client Agent for Windows
- CA ARCserve® Backup Enterprise Option for AS/400
- CA ARCserve® Backup Enterprise Option for Open VMS
- CA ARCserve® Backup for Microsoft Windows Essential Business Server
- CA ARCserve® Backup for Windows
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for IBM Informix
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Lotus Domino
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft Exchange Server
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft SharePoint Server
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Microsoft SQL Server
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Oracle
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Sybase
- CA ARCserve® Backup for Windows Agent for Virtual Machines
- CA ARCserve® Backup for Windows Disaster Recovery Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Module

- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for IBM 3494
- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for SAP R/3 for Oracle
- CA ARCserve® Backup for Windows Enterprise Option for StorageTek ACSLS
- CA ARCserve® Backup for Windows Image Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Microsoft Volume Shadow Copy Service
- CA ARCserve® Backup for Windows NDMP NAS Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Serverless Backup Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Storage Area Network (SAN) Option
- CA ARCserve® Backup for Windows Tape Library Option
- CA ARCserve® Backup Patch Manager
- CA ARCserve® Backup UNIX/Linux Data Mover
- CA ARCserve® D2D
- CA ARCserve® High Availability
- CA ARCserve® Replication
- CA VM:Tape for z/VM
- CA 1® Tape Management
- Common Services™
- eTrust® Firewall
- Unicenter® Network and Systems Management
- Unicenter® Software Delivery
- Unicenter® VM:Operator®

CA への連絡先

テクニカル サポートの詳細については、弊社テクニカル サポートの Web サイト (<http://www.ca.com/jp/support>) をご覧ください。

目次

第 1 章: クライアント エージェントの紹介	9
概要.....	9
クライアント エージェントを使用する利点.....	9
サポートされているクライアント システム	10
第 2 章: クライアント エージェントのインストール	13
インストール時の注意事項	13
Client Agent for Windows	13
Client Agent for NetWare	13
Enterprise Option for OpenVMS	14
UNIX、Linux、および Mainframe Linux プラットフォームにインストールされたクライアント エージェント向け の通信要件	15
クライアント エージェントのインストール	15
Common Agent の自動インストール	16
Common Agent と Client Agent 用のインストール ディレクトリ.....	16
第 3 章: クライアント エージェントの追加と設定	19
クライアント エージェントの追加	19
エージェントおよびノードの追加、インポート、エクスポートの方法.....	19
クライアント エージェントの手動追加	20
Windows Client Agent の設定	22
Windows を環境設定する際の注意事項	22
セキュリティ設定のオプション	22
バックアップの優先度およびリストア/比較の優先度オプション	23
複数同時のリストアまたは比較.....	23
バックアップおよびリストア実行オプション	24
Backup Agent 管理による Windows パラメータの設定	24
パスワード セキュリティの設定	27
選択した環境設定の表示	27
raw バックアップおよびリストアの有効化	28
Windows ネットワーク通信の環境設定.....	29
ワークステーション パスワードの設定	31
Windows アクセス コントロール リストの作成	32
ウイルス スキャンを実行する	33

カスタマイズ可能なローカル オプション	34
Client Agent for Windows がバックアップからデータベース アプリケーション ファイルを除外する仕組み	34
NetWare Client Agent の設定	35
NetWare 関連の環境設定をする際の注意事項	35
NetWare ネットワーク通信の環境設定	36
Novell ディレクトリ サービスのバックアップ	37
UNIX および Linux Client Agent の環境設定	37
UNIX および Linux の環境設定の際に考慮する事項	38
UNIX および Linux クライアント エージェントのコントロール ファイル	38
UNIX および Linux の Common Agent 環境設定ファイル	39
UNIX のスナップショットおよび Direct I/O のサポート	48
UNIX および Linux のアクセス コントロール リスト	53
AS/400 Enterprise Option の設定	56
開始設定	56
実行環境設定	57
停止設定	58
OpenVMS Enterprise Option の設定	58
ポート アドレスの設定	59
TCP/IP スタックの最適化	59
OpenVMS Enterprise Option のトレース レベル	59

第 4 章: クライアント エージェントの使用法 61

Runtime Statistics	61
Client Agent for Windows の Runtime Statistics の表示	61
NetWare クライアント エージェントのリアルタイム モニタの表示	62
アクティビティ ログ	62
Windows Server でのアクティビティ ログの表示	62
NetWare クライアント エージェント マシンでのアクティビティ ログの表示	63
UNIX または Linux クライアント エージェント マシンでのアクティビティ ログの表示	63
AS/400 Enterprise Option を実行しているコンピュータのアクティビティ ログ	64
OpenVMS Enterprise Option を実行しているコンピュータのアクティビティ ログ	64
Client Agent ログ ファイルの削除	64
Windows ネットワーク サーバのデータのバックアップ	65
Client Agent の開始と停止の手順	65
Windows の開始と停止の要件	65
NetWare の開始と停止の要件	66
UNIX および Linux クライアント エージェントの開始と停止	67
Enterprise Option for AS/400 の開始と停止の要件	68
Enterprise Option for OpenVMS の開始と停止の要件	69

第 1 章：クライアント エージェントの紹介

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[概要 \(9 ページ\)](#)

[クライアント エージェントを使用する利点 \(9 ページ\)](#)

[サポートされているクライアント システム \(10 ページ\)](#)

概要

CA ARCserve Backup は、アプリケーション、データベース、分散サーバおよびファイルシステム向けの包括的なストレージ ソリューションです。データベース、ビジネス クリティカルなアプリケーション、およびネットワーク クライアントにバックアップ機能およびリストア機能を提供します。CA ARCserve Backup に対応したエージェントとして、特定のオペレーティング システム専用のクライアント エージェントが用意されています。

クライアント エージェントは、ネットワーク コンピュータ上にインストールする独立したソフトウェア パッケージで、コンピュータと CA ARCserve Backup 間のネットワーク インターフェースを提供します。クライアント エージェントは、高い接続性を実現するだけでなく、ネットワーク上のバックアップ サーバとデータ ストレージ タスクを共有する機能を提供します。定期的なデータ バックアップおよびリストア機能を必要とするネットワーク マシンの数と種類によっては、複数のクライアント エージェントが必要となる場合があります。

本書では、ネットワーク ストレージ環境で使用するすべてのワークステーションおよびサーバについて、クライアント エージェントのインストール、環境設定、および追加に関する情報を提供します。

クライアント エージェントを使用する利点

CA ARCserve Backup クライアント エージェントは、集中化されたバックアップ サーバとメディアでタスクを処理することにより、ネットワーク リソースを維持する必要のある組織を対象に設計されています。クライアント エージェントは、以下のような機能を提供します。

- 通信ネットワークの負荷を最小限に抑えます。
- クライアント マシンでアーカイブ データの前処理を行うことで、CA ARCserve Backup サーバでの処理効率が向上します。

- リモート クライアントに関する詳細なファイル情報およびディレクトリ情報を CA ARCserve Backup サーバに提供します。
- サーバとの間で通信を行い、バックアップ コンポーネントをブラウズおよび選択できるようにします。
- バックアップ ジョブの処理状況の監視を支援します。
- バックアップおよびリストア アクティビティのステータスによるバックアップ ログの保持およびモニタ
- アプリケーションまたはファイル システムを容易にバックアップできます。

クライアント エージェントでは、1 台の CA ARCserve Backup サーバから、ネットワーク内のすべてのクライアント コンピュータ向けのデータ保護を強化することも可能です。

クライアント エージェントをネットワーク上のコンピュータにインストールすると、1 台の CA ARCserve Backup サーバを使用して、複数のコンピュータおよびオペレーティングシステム上の、データのバックアップとリストアが可能になります。

サポートされているクライアント システム

CA ARCserve Backup では、以下のプラットフォームをサポートするクライアント エージェントが提供されます。

注： サポートされているオペレーティング システムとバージョンの詳細については、CA ARCserve Backup インストール メディアに含まれる「Client Agent Readme ファイル」を参照してください。

- CA ARCserve Backup Client Agent for Windows このクライアント エージェントは、以下の OS をサポートしています。
 - Windows Server 2008
 - Windows Server 2008 R2
 - Windows 7
 - Microsoft Vista™
 - Windows 2000
 - Windows XP
 - Windows Server 2003
 - Windows Small Business Server (Windows 2000 および Windows 2003)
- CA ARCserve Backup Client Agent for NetWare

- CA ARCserve Backup Client Agent for UNIX このクライアント エージェントは、以下の OS をサポートしています。
 - AIX
 - HP-UX
 - Solaris
 - Tru64
 - FreeBSD
- CA ARCserve Backup Client Agent for Linux このクライアント エージェントは、以下の OS をサポートしています。
 - Red Hat
 - SuSE
 - Turbo
 - Debian
 - RedFlag
 - Miracle Linux
 - Asianux
- CA ARCserve Backup Client Agent for Mainframe Linux このクライアント エージェントは、以下の OS をサポートしています。
 - Red Hat Enterprise Server
 - SLES
- CA ARCserve Backup Enterprise Option for AS/400
- CA ARCserve Backup Client Agent for Mac OS X
- CA ARCserve Backup Enterprise Option for OpenVMS

第 2 章：クライアント エージェントのインストール

バックアップまたはリストアの処理を実行するには、適切な CA ARCserve Backup クライアント エージェント ソフトウェアがインストールされ、実行されている必要があります。クライアント エージェントでは、ワークステーションと CA ARCserve Backup サーバ間の通信機能を提供します。この章では、クライアント エージェントのインストール方法について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[インストール時の注意事項](#) (13 ページ)

[クライアント エージェントのインストール](#) (15 ページ)

[Common Agent の自動インストール](#) (16 ページ)

[Common Agent と Client Agent 用のインストール ディレクトリ](#) (16 ページ)

インストール時の注意事項

以下のセクションでは、クライアント エージェントをインストールする前に確認する必要がある情報を説明します。

Client Agent for Windows

Client Agent for Windows をインストールする前に、以下の考慮事項を確認します。

- Client Agent for Windows を実行する前に、以下のいずれかのネットワーク プロトコルを使用して通信するようにコンピュータを環境設定しておく必要があります。
 - TCP/IP (伝送制御プロトコル/インターネット プロトコル)
 - Windows Socket (WinSock)

Client Agent for NetWare

Client Agent for NetWare をインストールする前に、以下の考慮事項を確認します。

- Client Agent for NetWare は、NetWare サーバにのみインストールできます。また、NetWare のインストールを実行するには、ローカル マシンに Novell Client for Windows がインストールされている必要があります。
- NetWare サーバは、TCP/IP を使用して通信するように設定する必要があります。

- このクライアント エージェントをインストールする NetWare コンピュータの eDirectory ツリーに対して、スーパーバイザの権限を持っている必要があります。詳細については、Novell NetWare のマニュアルを参照してください。
- パフォーマンスを最適化するには、最新の NetWare C ライブラリ (CLIB) および SMS (Systems Management Server) モジュールを使用します。
- NetWare Loadable Modules (NLM) は Novell が提供します。

Enterprise Option for OpenVMS

Enterprise Option for OpenVMS をインストールする前に、以下の考慮事項を確認します。

- サポートされている Alpha および VAX オペレーティング システムを実行しているコンピュータでは、以下の通信ソフトウェアを使用して、TCP または UDP (User Data Protocol) を使用できます。
 - Compaq UCX 4.2 eco 3 (Alpha)
 - Compaq UCX 3.3 eco 13 (VAX)
 - Compaq TCP/IP バージョン 5.0～5.3
 - Process Software Multinet バージョン 4.1B (パッチ)～4.4
 - Process Software TCPWARE バージョン 5.3 および 5.4

重要: これらの通信パッケージは、必要に応じて、1 台のコンピュータに複数インストールすることができますが、一度に実行できるのは 1 つだけです。1 台のコンピュータで同時に 2 つ以上の通信パッケージを実行しないでください。

注: OpenVMS TCP/IP スタックを変更した場合は、必ず OpenVMS Enterprise Option を再インストールしてください。

- OpenVMS Enterprise Option をインストールする前に、OpenVMS システム ディスクをバックアップする必要があります。
- セットアップ ファイル用に、10 ブロック以上の空き領域があることを確認してください。

UNIX、Linux、および Mainframe Linux プラットフォームにインストールされたクライアント エージェント向けの通信要件

UNIX、Linux、および Mainframe Linux コンピュータにインストールされている CA ARCserve Backup エージェントと CA ARCserve Backup プライマリ サーバおよびメンバ サーバが確実に通信できるようにするためには、ファイアウォールがエージェント コンピュータ上に設定されている場合、そのファイアウォールを経由して CA ARCserve Backup がエージェントと通信できるようにする必要があります。 エージェント コンピュータ上のファイアウォールの例外リストに CA ARCserve Backup を追加することで、CA ARCserve Backup とエージェント コンピュータとの通信を可能にすることができます。

エージェントをインストールする前に、エージェント コンピュータ上のファイアウォールの例外リストに CA ARCserve Backup を追加することをお勧めします。

この要件は、以下の CA ARCserve Backup コンポーネントに影響します。

- Client Agent for UNIX
- Client Agent for Linux
- Client Agent for Mainframe Linux
- UNIX プラットフォーム上の Oracle Agent
- Linux プラットフォーム上の Oracle Agent
- UNIX/Linux Data Mover

エージェント コンピュータ上でファイアウォールを設定する方法の詳細については、各プラットフォームのドキュメントを参照してください。

注: デフォルトでは、CA ARCserve Backup はポート 6051 を使用して通信します。

クライアント エージェントのインストール

Windows クライアント エージェントまたはクロスプラットフォーム エージェントをインストールするには、CA ARCserve Backup for Windows DVD を使用します。

CA ARCserve Backup クライアント エージェントのインストールの詳細については、CA ARCserve Backup インストール ブラウザ上の以下のリンクをクリックします。

- Windows 以外のプラットフォーム用の CA ARCserve Backup Client Agent のインストール手順。
- UNIX/Linux Data Mover のインストール手順。

Common Agent の自動インストール

UNIX、Linux、または Mac OS X のクライアント エージェントをインストールすると、CA ARCserve Backup Common Agent が自動的にインストールされます。

Common Agent と Client Agent 用のインストール ディレクトリ

以下の表では、CA ARCserve Backup Common Agent 用および UNIX と Linux プラットフォーム向け CA ARCserve Backup Client Agent 用のデフォルト インストールパスについて説明します。

プラットフォーム	バージョン	Common Agent /エージェント環境設定ファイル	Client Agent (File System Agent)
AIX		/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
HP		/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
Solaris	SPARC 8, 10 x86	/opt/CA/BABcmagt	/opt/CA/BABuagent
Solaris	SPARC 9, 10	/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
Linux	SUSE Redhat Linux-OES Asianux Miracle Red Flag Turbo Linux	/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
Mainframe Linux	Red Hat SUSE	/opt/CA/BABcmagt	/opt/CA/BABuagent
FreeBSD		/opt/CA/BABcmagt	/opt/CA/BABuagent
Debian		/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
ESX		/opt/CA/ABcmagt	/opt/CA/ABuagent
Tru64		/opt/CA/BABcmagt	/opt/CA/BABuagent

注： 上記のディレクトリは、ファイル システム エージェントおよび Agent for Oracle 用の他の関連する環境設定ファイルと共に Common Agent 環境設定ファイル (agent.cfg) の中にも記述されています。

オペレーティング システムのサポートされているバージョンの全リストについては、CA ARCserve Backup インストール メディアに含まれている Client Agent Readme ファイルを参照してください。

第 3 章：クライアント エージェントの追加と設定

CA ARCserve Backup およびその数種類のクライアント エージェントをインストール後、ネットワーク上の各クライアント エージェント マシンをバックアップ サーバに追加して設定する必要があります。この章では、クライアント エージェントの追加および設定の手順について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[クライアント エージェントの追加](#) (19 ページ)

[Windows Client Agent の設定](#) (22 ページ)

[NetWare Client Agent の設定](#) (35 ページ)

[UNIX および Linux Client Agent の環境設定](#) (37 ページ)

[AS/400 Enterprise Option の設定](#) (56 ページ)

[OpenVMS Enterprise Option の設定](#) (58 ページ)

クライアント エージェントの追加

Windows サーバに CA ARCserve Backup をインストールしている場合、ノードの追加、インポート、エクスポート機能を使用してネットワークからクライアント エージェントを追加するか、手動でクライアント エージェントを追加することができます。以下のセクションでは、これらの方法について説明します。

エージェントおよびノードの追加、インポート、エクスポートの方法

複数のエージェントやノードが存在する環境でのジョブのセットアップは、時間や手間がかかる場合があります。複数のエージェントやノードをバックアップする場合、エージェントやノードを 1 つずつバックアップ マネージャに追加すると時間がかかります。エージェントの追加/インポート/エクスポート機能やノードの追加/インポート/エクスポート機能では、ノードやエージェントを実際にバックアップするかどうかに関係なく、CA ARCserve Backup ユーザ インターフェースを使って複数のノードやエージェントを追加できます。

注： セントラル エージェント管理でも、エージェントやノードを追加、インポート、エクスポートできます。

ノードの追加/インポート/エクスポート機能を使用して、次のいずれかの方法で複数のノードやエージェントをシステムに追加できます。

ユーザ インターフェースを使用して複数のノードやエージェントを追加する方法

1. バックアップ マネージャの[ソース]タブ、またはリストア マネージャの[デスティネーション]タブから、ノードを選択します。
2. [ノードの追加/インポート/エクスポート]ダイアログを使用して、すべてのノードやエージェントの名前を手動で入力するか、左側のペインにあるオートディスカバリで検出されたノードとエージェントのリストからノードを選択します。
3. ノードのユーザ名とパスワードを指定します。
4. 情報を CA ARCserve Backup データベースに保存します。
5. ノードとエージェントは、バックアップ マネージャの[ソース]ツリーまたは[セントラル エージェント管理]に表示されます。

.csv ファイルおよび .txt ファイルを使用して複数のノードやエージェントを追加する

1. バックアップ マネージャの[ソース]タブ、またはリストア マネージャの[デスティネーション]タブから、ノードを選択します。
2. [ノードの追加/インポート/エクスポート]ダイアログ ボックスのインポート機能を使用し、このユーザ インターフェースから .csv ファイルまたは .txt ファイルの名前を指定します。

ノードとエージェントの名前は .csv ファイルまたは .txt ファイルからインポートされ、システムに追加されます。
3. ノードとエージェントのユーザ名とパスワードを指定します。
4. ノードとエージェントは、バックアップ マネージャの[ソース]ツリーに表示されます。

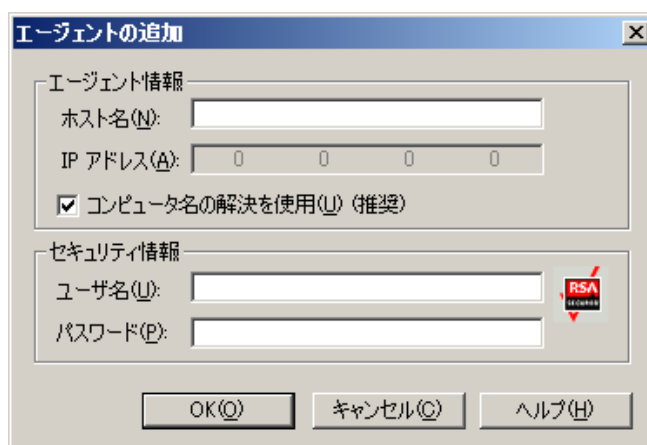
クライアント エージェントの手動追加

何らかの理由によりオート ディスカバリでネットワーク内のすべてのクライアント エージェントが検出されない場合、または特定のクライアント エージェントを追加したい場合は、Windows マネージャ インターフェースを使用する NetWare サーバまたは Windows サーバに手動でクライアント エージェントを追加できます。手動でクライアント エージェントを追加するには、各クライアント エージェント マシンをバックアップ マネージャに追加する必要があります。

クライアント エージェントを手動で追加する方法

1. [バックアップ マネージャ]を開き、[ソース]タブをクリックします。
2. Windows などの適切なクライアント エージェント オブジェクトを右クリックします。
3. [マシン/オブジェクトの追加]を選択します。

[エージェントの追加]ダイアログ ボックスが表示されます。



4. [ホスト名]フィールドに、コンピュータ名を入力します。

注: NetWare クライアント エージェントを追加する場合、ホスト名には Novell サーバ名を使用する必要があります。

5. コンピュータとの接続に使用するプロトコルを選択します。

- **TCP/IP** - [TCP/IP]を選択し、Windows クライアント エージェントを追加する場合は、[コンピュータ名の解決を使用]を選択します。コンピュータ名の解決を使用すると、バックアップまたはリストア処理のための接続時に、リモートの Windows マシンの IP アドレスをローカルの Windows マシンで自動的に検出できます。これを選択することをお勧めします。ユーザがコンピュータの IP アドレスを知らない場合にも有効です。

注: 対象の Windows コンピュータが動的 IP アドレスを使用している場合は、コンピュータの名前解決を使用してください。

追加するエージェントが Windows クライアント エージェントではない場合に、DNS サーバまたはネットワークのさまざまな設定問題が原因でコンピュータの名前解決に失敗したり、対象のコンピュータの複数の IP アドレスの中から特定のアドレスを使用していることを確認したりする場合は、[コンピュータ名の解決を使用]オプションをオフにして、IP アドレスを入力します。

6. [追加]をクリックします。

サーバにクライアント エージェントが追加されます。

Windows Client Agent の設定

以下のセクションでは、Windows Client Agent の環境設定オプションについて説明します。

Windows を環境設定する際の注意事項

Windows クライアント エージェントの環境設定に関する一般情報には以下のものがあります。

- **システム状態のリストア** - システム状態のリストアでは、[ファイルを元の場所にリストア]オプションをサポートします。

注: システム状態では、別の場所へのリストアもサポートします。ただし、リストア時にエージェントが作成したデフォルトのディレクトリにファイルを配置するため、処理システムを再作成しません。

- **共有サポート** - [エージェントを使用]オプションを選択した場合、共有名を物理パスに変換することにより、バックアップ マネージャの[優先する共有名/マシン名]オブジェクトで選択した共有がクライアント エージェントでバックアップされます。

注: Windows プラットフォームの場合、クライアント エージェントは共有をリストアしません。また、管理共有を除き、共有をデスティネーションとしてサポートしません。

- **システム ハイブのリストア処理** - KeysNotToRestore 機能は、システム ハイブの通常のリストア処理中に、機密性の高いシステムのレジストリ キーを保護するように設計されています。ただし、クライアント エージェントのレジストリ セッションを使用して個々のシステム キーをリストアする場合、この機能は利用できません。

セキュリティ設定のオプション

Client Agent for Windows のセキュリティ オプションは、[設定]ダイアログ ボックスで定義します。セキュリティの種類には、以下の選択肢があります。

システム セキュリティ

Windows セキュリティを使用して、バックアップ、比較、リストアの操作が実行できます。Client Agent は、ネットワークのアクティブなユーザを装います。つまり、ユーザ名とパスワードを使用してログオンします。この ID とパスワードは、ローカルユーザ データベース、またはワークステーションがドメインに属している場合はそのドメイン データベースに記録されている有効なユーザを特定するものです。

パスワードのセキュリティ

セキュリティのために個別のパスワードを設定できます。この設定によって、Client Agent をローカルのシステム アカウントで実行できるようになります。デフォルトでは、パスワード セキュリティは無効になっています。

注：パスワード セキュリティが選択され、マシンに DSA ベースのデータベース エージェント(たとえば、Sybase、Informix など)がインストールされている場合、ノード全体のバックアップはサポートされていません。データベースのみをバックアップするには、ジョブをサブミットする前に、[セキュリティおよびエージェント情報] ダイアログ ボックスでセキュリティ情報をシステム セキュリティに変更する必要があります。

バックアップの優先度およびリストア/比較の優先度オプション

Client Agent for Windows のプロセスの優先度は、[設定]ダイアログ ボックスで定義します。[バックアップの優先度]および[リストア/比較の優先度]で以下のいずれかの設定を選択します。

高

他の処理よりも優先して Client Agent の機能を実行します。

通常

通常の優先度で Client Agent の機能を実行します。

低

他のプロセスの休止中にクライアント エージェントのジョブを実行します。

複数同時のリストアまたは比較

Client Agent for Windows の同時リストアおよび比較は、[設定]ダイアログ ボックスで有効にします。Windows Client Agent で同時に複数のリストア ジョブまたは比較ジョブを受け入れる場合は、[設定]ダイアログ ボックスで[同時に複数のリストア ジョブまたは比較ジョブを許可する]オプションを有効にします。

バックアップおよびリストア実行オプション

Client Agent for Windows の実行オプションは、[設定]ダイアログ ボックスで定義します。実行前のプログラム、実行後のプログラムを選択して、実行遅延を定義します。

実行前

バックアップまたはリストア操作の前に自動的に実行するバッチ プログラム(例: C:\WINAGENT\PRE.CMD)の名前を入力または選択します。

実行後

バックアップ操作やリストア操作の後に自動実行するバッチ プログラムの名前(たとえば、C:\WINAGENT\POST.CMD)を入力または選択します。

実行遅延

バッチ ジョブの前後で、エージェントが待機する時間を秒単位で選択します。

Backup Agent 管理による Windows パラメータの設定

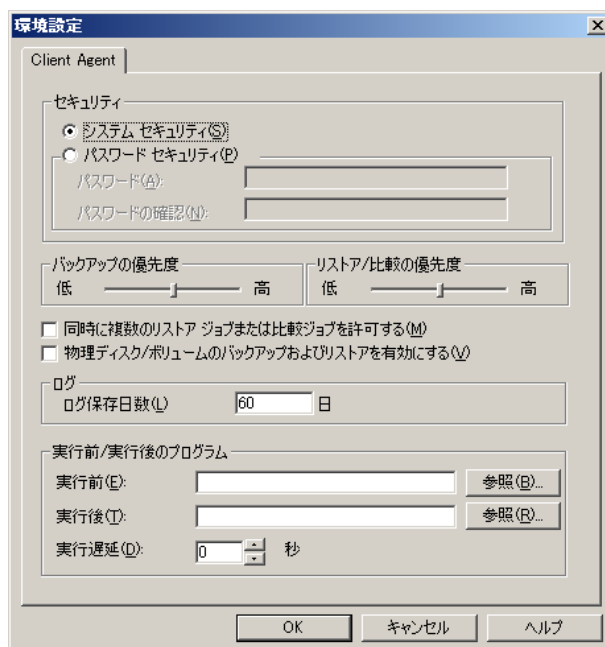
Windows パラメータの設定に Backup Agent 管理を使用する方法

1. [スタート]-[プログラム](または[すべてのプログラム])-[CA]-[ARCserve Backup Agents]-[Backup Agent 管理]の順に選択し、Backup Agent 管理にアクセスします。

注: 使用しているオペレーティング システムによって、各クライアント エージェントのウィンドウの表示内容が多少異なる場合があります。

2. Backup Agent 管理から[オプション]タブを選択します。

[環境設定]ダイアログ ボックスが表示されます。



[環境設定]ダイアログ ボックスでは、以下の設定を定義できます。

■ [セキュリティ] - 以下のいずれかのセキュリティのタイプを選択します。

[システム セキュリティ] - Windows のセキュリティを使用してバックアップ、比較、リストアの各操作を実行する場合に選択します。Client Agent は、ネットワークのアクティブなユーザを装います。つまり、ユーザ名とパスワードを使用してログオンします。この ID とパスワードは、ローカル ユーザ データベース、またはワークステーションがドメインに属している場合はそのドメイン データベースに記録されている有効なユーザを特定するものです。

注: システム セキュリティを選択すると、クライアント エージェントを使用してバックアップするパーティション、フォルダ、ファイルを選択し、クライアント エージェントのバックアップ アカウントが表示専用組織の管理の役割またはそれより高い権限を持つドメイン アカウントの場合、Exchange Server 2010 データベース ファイルはバックアップされません(つまり、それらはスキップされます)。パスワード セキュリティを選択し、ローカル管理者または表示専用組織の管理権限のないドメインアカウントのようなその他のアカウント役割を使用すると、Exchanger Server 2010 データベースはスキップされません。これらのデータベース ファイルが使用されている場合、警告が表示されます。

[パスワード セキュリティ] - セキュリティを確保するために個々のパスワードを設定する場合に選択します。この設定によって、Client Agent をローカルのシステム アカウントで実行できるようになります。デフォルトでは、パスワード セキュリティは無効になっています。

- **[バックアップ/リストア/比較の優先度]** - バックアップ、リストア、または比較の各処理に必要なプロセスに与える優先順位を指定します。[バックアップの優先度]および[リストア/比較の優先度]で以下のいずれかの設定を選択します。

[高] - 他の処理よりも優先して Client Agent の機能を実行します。

[標準] - 通常の優先度で Client Agent の機能を実行します。

[低] - 他の処理が「アイドル」状態のときに、通常の優先度で Client Agent の機能を実行します。

- **[同時に複数のリストア ジョブまたは比較ジョブを許可する]** - Windows Client Agent で同時に複数のリストア ジョブまたは比較ジョブを受け入れる場合に、このオプションを有効にします。

注: デフォルトでは、このオプションは無効になっています。これは、リストア ジョブの実行中に、同じデータ セットの新しいバックアップ ジョブまたはリストア ジョブが間違えて起動されないようにするためです。このような状況が発生すると、エージェントにより、新しいジョブのリクエストが拒否され、クライアント エージェントが使用中であることが CA ARCserve Backup サーバに報告されます。

- **[物理ディスク/ボリュームのバックアップおよびリストアを有効にする]** - 物理ディスクとボリュームの raw バックアップとリストアを実行できます。

注: 詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

- **[ログ]** - ログ ファイルは次のパスに格納されています。
<ARCserve_HOME>%ARCserve Backup Client Agent for Windows%ntagent.log 実行されるすべてのジョブのログがこのログ ファイルに保存されます。

[ログ保存日数] - エージェントのログを保存する日数(デフォルトは 60 日)を指定します。指定した日数が経過すると、次のエージェントのバックアップ、リストア、または比較ジョブが実行される際にログが削除されます。

- **[実行前/実行後のプログラム]** - 以下の実行オプションを選択します。

[実行前] - バックアップ操作前に自動実行するバッチ プログラムの名前(たとえば、C:%WINAGENT%\PRE.CMD)を入力または選択します。

[実行後] - バックアップ操作の後に自動実行するバッチ プログラムの名前(たとえば、C:%WINAGENT%\PRE.CMD)を入力または選択します。

[実行遅延] - バッチ ジョブの終了から Client Agent を開始するまでの時間、または Client Agent の終了からバッチ ジョブを開始するまでの時間(秒)を選択します。

3. **[OK]**をクリックすると、設定が保存され、ダイアログボックスが閉じます。

注: 後で環境設定を変更するには、[環境設定]ダイアログボックスまで戻る必要があります。

パスワード セキュリティの設定

クライアント エージェント サービスは、ノード(マシン)ユーザ名と割り当てられたパスワードを使用して CA ARCserve Backup ネットワークにログオンします。

クライアント エージェントのパスワード セキュリティを設定する方法

1. バックアップ マネージャを起動し、マシン名を右クリックします。ポップアップ メニューが表示されます。
2. コンテキスト メニューから[セキュリティ]を選択して、[セキュリティ]ダイアログ ボックスを開きます。[ユーザ名]フィールドには、クライアント エージェントに割り当てられたユーザ名が表示されています。
3. クライアント エージェントのパスワードを入力します。

注: このユーザ名およびパスワードによって、ローカル マシンのデータベースに記録されている正規のユーザであることが識別されます。また、ワークステーションがドメインのメンバである場合は、ドメインのデータベースに記録されている正規のユーザであることが識別されます。

また、使用するアカウントを指定する場合、所属するドメイン名をそれぞれのアカウントに付与することで、2 つの同名アカウント(Administrator など)を区別する必要があります。ユーザ名を識別する際、ツリー形式の名前を使用することで、クライアント オブジェクトを識別できます。たとえば、「ENGINEER」というワークステーションを含む「NTDEV」というドメインの場合、それぞれの Administrator は以下のようになります。

NTDEV¥Administrator

ENGINEER¥Administrator

選択した環境設定の表示

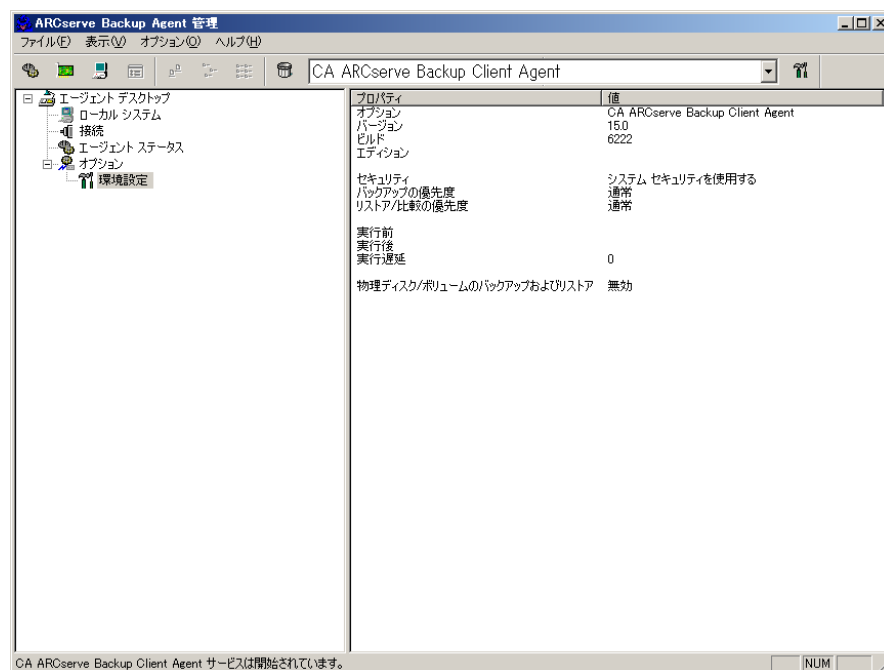
環境設定に変更を加える前に、現在の設定を確認してください。

設定の選択を表示する方法

1. [Backup Agent 管理]ウィンドウを開きます。

2. [オプション]を展開して、[設定]を選択します。

現在の設定が表示されます。



raw バックアップおよびリストアの有効化

CA ARCserve Backup を使用して、物理ディスクおよびボリュームの **raw** バックアップおよびリストアを実行することができます。

物理ディスクおよびボリュームの **raw** バックアップおよびリストアを実行する機能は、デフォルトでは無効になっています。各エージェントのオプションを有効にする必要があります。

物理ディスク/ボリュームの raw バックアップおよびリストアを有効にする方法

1. Windows で [スタート]-[プログラム]-[CA]-[ARCserve Backup]-[Backup Agent 管理]を選択します。

[ARCserve Backup Agent 管理]ウィンドウが表示されます。

2. [オプション]-[環境設定]をクリックします。

[環境設定]ウィンドウが表示されます。

3. [物理ディスク/ボリュームのバックアップおよびリストアを有効にする]をクリックします。
4. [OK]をクリックします。

raw バックアップおよびリストアの機能がエージェントで有効化されます。**raw** バックアップおよびリストアの実行方法の詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

Windows ネットワーク通信の環境設定

CA ARCserve Backup クライアント エージェント サービスは、設定済みのすべてのクライアント エージェント全体で共有されます。デフォルトでは、Windows Client Agent はポート 6050 (TCP/UDP) を使用します。Backup Agent 管理の[ネットワークの設定]メニューからこの動作を変更できます。

Windows ネットワーク通信を設定する方法

1. [Backup Agent 管理]ウィンドウを開きます。
2. [オプション]メニューから[ネットワークの設定]を選択します。

ネットワークの設定

ポート番号の選択

Backup Agent は、これらのポート設定値を使用して受信待機します。

TCP/IP(T) 6050 リセット

UDP(U) 6050 リセット

VI プロトコル

☐ VI サポートを有効にする(E) エージェントが、仮想インターフェース プロトコルを使用して通信を試行するようにします。

☐ IP アドレス(A)

155.35.138.126 エージェントが通信に使用する IP アドレスを指定します。

新しい設定を適用するには、Client Agent for Windows サービスを再起動する必要があります。サービスが再起動したら、[エージェント ステータス] ビューで設定を確認できます。

OK(Q) キャンセル(C) ヘルプ(H)

3. このダイアログ ボックスを使用して、クライアント エージェントに対する以下のネットワーク パラメータを設定します。

ポート番号の選択

デフォルトを受け入れるか、CA ARCserve Backup で使用するポート番号を入力します。元のデフォルト ポートを使用する場合は、[リセット]ボタンをクリックします。更新されたポート情報は、ローカルの %Program Files%\CA\SharedComponents\ARCserve Backup にある PortsConfig.cfg ファイルに保存されます。

注：更新されたポート情報は、CA ARCserve Backup サーバ コンポーネントに登録する必要があります。ポート情報を登録するには、リモート サーバ上の PortsConfig.cfg を修正します。ポートの設定の詳細については、「実装ガイド」を参照してください。

IP アドレスの選択

Windows Client Agent は、複数の ネットワーク インタフェース カード (NIC) の使用をサポートしています。コンピュータが複数の NIC を搭載している場合、Agent にはマシン上で有効なすべての NIC が表示されます。バックアップ専用を使用する NIC の IP アドレスを選択することにより、すでに選択されているアドレスを手動で無効にできます。この設定を定義する場合、Client Agent はこのインターフェイス カードのみを使用します。他のすべての NIC は無視され、それらの IP アドレスは Client Agent への接続に使用できません。

更新した情報は、Windows の CAPortConfig.cfg ファイルでも同様に修正し、CA ARCserve Backup のホーム ディレクトリにコピーする必要があります。以下に、CAPortConfig.cfg ファイルの例を示します。

```
#Hostname IP address (optional) TCP ポート UDP ポート
#myhost   nnn.nnn.nnn.nnn    6050    6050
mymachine nnn.nnn.nnn.nn     7090    7085
```

ワークステーション パスワードの設定

[Backup Agent 管理]で Windows クライアント エージェントの設定中に[パスワード セキュリティ]をオンにした場合は、CA ARCserve Backup でも同じパスワードを指定する必要があります。

ワークステーション パスワードを設定する方法

1. バックアップ マネージャで、クライアント エージェントの名前を右クリックします。
2. コンテキスト メニューから[セキュリティ]を選択します。



3. ローカルの Windows ユーザ アカウント名を入力するか、Windows ドメイン アカウントをツリー形式で入力します。
4. パスワードを入力して[OK]をクリックします。

注: クライアント エージェントを使用してリモート クライアントのバックアップおよびリストアを行う場合、クライアント エージェント用に設定されたパスワードはワークステーション用に設定されたシステム アカウントのパスワードよりも優先されます。バックアップ ジョブでクライアント エージェント ソフトウェアを使用しない場合は、[バックアップ マネージャ]ウィンドウで、システム アカウントのパスワードを指定する必要があります。バックアップ マネージャ上のパスワードとシステム アカウントのパスワードが一致していることを確認します。

Windows アクセス コントロール リストの作成

アクセス コントロール リスト(ACL)を生成することで、Windows クライアント エージェント オブジェクト上でバックアップを実行する権限を持つサーバを制限できます。この機能は、バックアップ マネージャおよび Backup Agent 管理で定義できます。アクセス コントロール リストを作成し、そのタイプを定義することにより、データ バックアップとリストアの処理を、特定のクライアント エージェントについて特定のグループの CA ARCserve Backup サーバのみで実行するように制限できます。ACL の種類は以下のとおりです。

ACL を使用しない

リストを指定しません。これはデフォルト設定です。

対象サーバ リスト

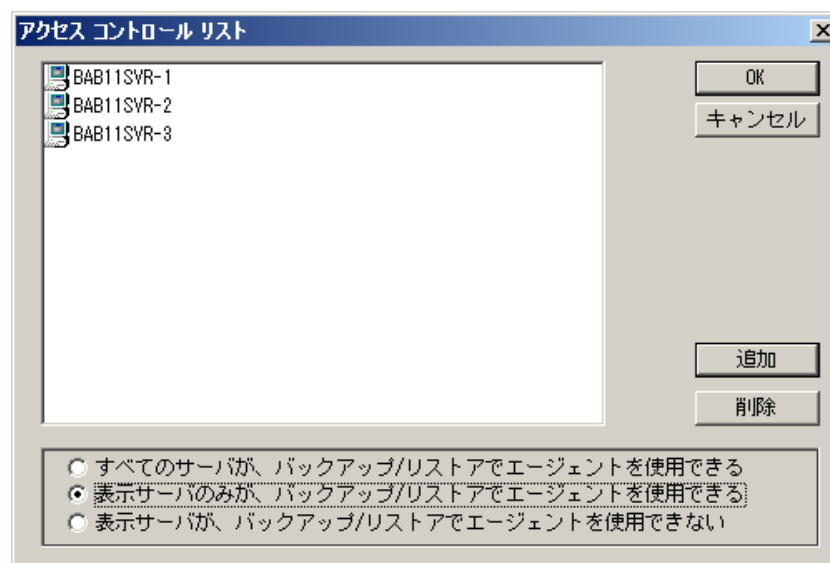
バックアップおよびリストア オプションのために、クライアント エージェント マシンへのアクセスが許可されているサーバのリスト。

除外サーバ リスト

バックアップおよびリストアの処理のために、クライアント エージェント マシンへのアクセスが許可されていないサーバのリスト。ネットワーク上の他のサーバはすべて、クライアント オブジェクトにアクセスできます。

Windows アクセス コントロール リストを作成する方法

1. [Backup Agent 管理]ウィンドウを開きます。
2. [オプション]メニューから[アクセス コントロール リスト]を選択します。



3. デフォルトの設定では ACL を使用しないので、[アクセス コントロール リスト]ダイアログ ボックスが表示されると、**[すべてのサーバが、バックアップ/リストアでエージェントを使用できる]**オプションがオンになっています。ACL を作成するには、以下のオプションの**いずれか**を選択します。
 - [表示サーバのみが、バックアップ/リストアでエージェントを使用できる]
 - [表示サーバが、バックアップ/リストアでエージェントを使用できない]
4. [追加]ボタンをクリックして、必要な数のクライアント エージェントの名前をアクセス コントロール リストに追加します。リストからクライアント エージェントを削除するには、削除する各クライアント エージェントに対し、[削除]ボタンをクリックします。
5. クライアント エージェントの名前の追加または削除が終了したら、[OK]ボタンをクリックします。

ウイルス スキャンを実行する

CA Anti-Virus ソフトウェアは、重要なデータに対する保護を強化し、バックアップおよびリストア アクティビティの実行中にもウイルスの脅威からデータを保護します。

このオプションを使用すると、バックアップ、コピー、カウント、およびリストアの処理中に、自動的にウイルスを検出してファイルを修復するように、Windows クライアント エージェントを環境設定できます。

ウイルス スキャンを有効にする方法

1. バックアップ マネージャまたはリストア マネージャを開きます。
2. ツールバーの[オプション]ボタンをクリックし、[グローバル オプション]ダイアログ ボックスを表示します。
3. [ウイルス]タブをクリックします。
4. [ウイルス スキャンを実行]を選択します。
5. クライアント エージェントに適用するウイルス スキャン オプションをクリックします。利用可能なオプションを以下に示します。

スキップ

ウイルス感染したファイルをバックアップ/リストアしません。

名前の変更

感染ファイルの拡張子を「AVB」に変更します(例: 0.AVB、1.AVB、2.AVB)。拡張子が AVB の同名のファイルが存在する場合、システムは、その拡張子に数字を付けた拡張子を使用してファイルの名前を変更します。たとえば、AV0、AV1、AV2を使用します。

削除

ウイルスに感染したファイルを削除します。

駆除

CA Anti-Virus で感染ファイルとして検出されたファイルを修復します。[修復]オプションを使用すると、ユーザが関与することなく、バックアップ処理中に自動的に感染ファイルが修復されます。

6. 各アーカイブに含まれる個々のファイルを検査するには、[圧縮ファイルをスキャンする]オプションをオンにします。

注: このオプションをオンにすると、バックアップまたはリストアのパフォーマンスが低くなります。

カスタマイズ可能なローカル オプション

クライアント エージェント オブジェクトを右クリックすると、ローカル バックアップ オプションをカスタマイズできます。明示的なジョブ パッケージの詳細については、「実装ガイド」を参照してください。ローカル オプションをカスタマイズする際にソースを選択する方法については、「管理者ガイド」を参照してください。

Client Agent for Windows がバックアップからデータベース アプリケーション ファイルを除外する仕組み

Client Agent for Windows は、バックアップの実行時に、Microsoft Exchange および Microsoft SQL Server などのデータベース アプリケーションのバックアップから、データベース ファイルおよびログ ファイルを除外できます。

バックアップ ジョブの実行中に、Client Agent for Windows はデータベース エージェントと通信し、バックアップ ジョブがファイル システム バックアップから除外する必要のあるファイルのリストを取得します。その後、Client Agent for Windows は、データベース エージェントから受信した応答に基づき、ファイル システム バックアップからファイルを除外します。データベース エージェントがオフラインの場合、Client Agent はすべてのファイルをバックアップする必要があるとみなし、ファイル システム バックアップ ジョブはその前提で処理されます。

例:

バックアップ ソースとして Microsoft Exchange Server ディレクトリを選択し、Client Agent for Windows を使用してファイル システム バックアップを実行すると、以下の除外動作が発生します。

- Exchange 情報ストアがオンラインの場合、Agent for Microsoft Exchange Server は、バックアップ ジョブから除外する必要がある Exchange データベース ファイルおよびログ ファイルのリストを提供します。

その結果、CA ARCserve Backup は除外されたファイルをスキップし、ファイル システム バックアップを完了します。

- Exchange 情報ストアがオフラインの場合、Agent for Microsoft Exchange Server は、バックアップ ジョブから除外する必要がある Exchange データベース ファイルおよびログ ファイルとして空のリストを提供します。

その結果、CA ARCserve Backup は Exchange サーバ ファイルをスキップせず、ファイル システム バックアップにすべてのファイルを含めます。

NetWare Client Agent の設定

以下のセクションでは、CA ARCserve Backup NetWare Client Agent の環境設定について説明します。

注: Novell client for Windows で Windows マシンを設定する必要があります。設定すると、ネットワークで NetWare サーバをインストールして実行できるようになります。

NetWare 関連の環境設定をする際の注意事項

NetWare クライアント エージェントを環境設定する場合には、以下の点に注意してください。

- 複数のジョブはサポートされていません。NetWare クライアント エージェントで一度に実行できるジョブは 1 つのみです。複数の CA ARCserve Backup サーバからクライアント エージェントに同時にジョブをサブミットしようとすると、現在のジョブが正常に実行されません。
- CA ARCserve Backup は、バックアップ中に開いている NetWare ファイルをスキップします。一部の 경우에는、NetWare クライアント エージェントを使用して NetWare ファイルをバックアップする際に複数のファイルが開いていると検出され、それらのファイルのバックアップがスキップされることがあります。この場合は、[バックアップ オプション]ダイアログ ボックスで[再試行]タブを選択し、[ファイル共有]セクションで[書き込み禁止モードで失敗した場合、ロック モードを使用]オプションを選択して、ジョブを再サブミットします。

- NetWare では、パスの長さは最大 255 文字に制限されます(例、DIR1¥DIR2¥...DIRx)。この制限があるのは NetWare のみです。Windows、UNIX、または Linux システム用などの、他のクライアント エージェントにこの制限はありません。

注: NetWare のパスの長さが 255 文字を超えてもバックアップとリストアの処理は正常に実行できますが、ブラウザでは長いパスのエントリは切り捨てられて表示されます。また、同じタイプのクライアント エージェントにリストアする場合、ファイルを元の場所にリストアすること、および別の場所にリストアすることは可能です。

NetWare ネットワーク通信の環境設定

NetWare クライアント エージェントを環境設定して通信を可能にするには、ASCONFIG.INI ファイルを編集して、システム管理者がクライアント エージェントに割り当てた IP アドレスを指定します。複数の IP アドレスを持つサーバでは、IP アドレスを指定すると便利です。先頭の固定アドレスを使用する代わりに、クライアント エージェントは ASCONFIG.INI ファイルから使用する IP アドレスを見つけます。

ASCONFIG.INI ファイルを編集する方法

1. テキスト エディタで、クライアント エージェントのホーム ディレクトリにある ASCONFIG.INI ファイルを開きます。
2. このファイルの NetWare クライアント エージェントセクションに以下の行を追加し、クライアント エージェントで使用する IP アドレスを指定します。

```
IPAddress = nnn.nnn.nnn.nnn
```

NetWare クライアント エージェントのセクションがない場合は、ASCONFIG.INI ファイルの最後に以下の行を追加して作成します。

```
[Netware Agent]
```

3. ファイルを保存し、エディタを終了します。
4. クライアント エージェントをアンロードして再開します。ASCONFIG.INI ファイルの変更を有効にするために、必ずアンロードしてください。クライアント エージェントをアンロードするには、NetWare クライアント エージェントの[Unload & Exit]メニュー オプションを使用します。または、サーバ コンソールで以下のコマンドを入力します。

```
unload nwagent
```

5. クライアント エージェントをアンロードした後、サーバ プロンプトで以下のコマンドを発行することで、クライアント エージェントを再開 (リロード) します。

```
nwagent
```

ASCONFIG.INI ファイルで指定した IP アドレスが正しいかどうかを確認するメッセージが、以下のように表示されます。

```
「IP Address nnn.nnn.nnn.nnn from ASCONFIG.INI file will be used.」
```

クライアント エージェント ランタイム メッセージ画面にも同様のメッセージが、以下のように表示されます。

```
「IP Address nnn.nnn.nnn.nnn is bound for use by NetWare Push Agent.」
```

これで、ASCONFIG.INI ファイルに指定した IP アドレスを使用してバックアップおよびリストア ジョブを実行する準備が整いました。

Novell ディレクトリ サービスのバックアップ

Novell ディレクトリ サービス (NDS) を適切にバックアップするには、[NDS ログオン名:] フィールドに完全な NDS 名 (フル コンテキスト名) を入力する必要があります。以下に例を示します。

```
.cn=admin.o=organization_name
```

NetWare のセッションをリストアする際にセキュリティ情報が要求された場合、NDS のフルコンテキストを入力する必要があります。

UNIX および Linux Client Agent の環境設定

UNIX または Linux のクライアント エージェントの環境設定ファイルである `uag.cfg` は、クライアント エージェントのホーム ディレクトリのリモート クライアント ワークステーションにあります。このファイル (ジョブがワークステーションにサブミットされるたびに、エントリがスキャンされます) は、クライアント エージェントに関連する複数のオプションを設定するのに使用できます。

重要: エージェントの環境設定の変数は、CA テクニカル サポートの担当者より指示がない限り変更しないでください。

UNIX および Linux の環境設定の際に考慮する事項

UNIX および Linux プラットフォームの環境設定で注意する必要がある点は、以下のとおりです。

- **セッション パスワード** - UNIX および Linux セッションには 22 バイトより長いセッション パスワードを使用できません。
- **1 文字のディレクトリ名** - 1 文字のディレクトリ名をリストアするときに、リストアビューにメッセージが表示されることがあります。データはデータベース ビューには正しく表示されます。
- **シンボリック リnkのトラバースと NFS のトラバース** - [シンボリック リnkのトラバース]および[NFS のトラバース]オプションは、リストア処理ではサポートされていません。

注: これらクライアント エージェントに対する CA ARCserve Backup オプション定義の中の環境設定に矛盾が存在する場合は、手動で uag.cfg 環境設定ファイルに入力したオプションより、バックアップ マネージャを使用して設定したオプションの方が必ず優先されます。

UNIX および Linux クライアント エージェントのコントロール ファイル

UNIX および Linux クライアント エージェントのコントロール ファイルでは、特定のワークステーションで実行するバックアップ処理から除外するディレクトリ、ファイル システム、またはファイル システムの種類を指定します。特に、以下のパッケージを UNIX および Linux クライアント エージェントとしてインストールする必要があります。

- Common Agent
- Universal Agent (uagent)

注: Uagent をインストールする前に、Common Agent がインストールされている必要があります (Uagent を最初にインストールする時に自動的にインストールされます)。

両方のパッケージでインストールされるコントロール ファイルを以下に示します。

- ディレクトリ コントロール ファイル

ディレクトリ コントロール ファイルである uag.cntl を使用して、ワークステーションで実行するバックアップ処理から除外するすべてのディレクトリまたはファイル システム(またはその両方)をリストします。このファイルでディレクトリおよびファイル システムを指定するには、スラッシュ (/) で始まる、完全なパス名を 1 行で入力します。
例:

```
/opt/account1
```

注: ディレクトリ コントロール ファイルは、クライアント エージェント ワークステーション上の uagent のホーム ディレクトリに保存されます。

- ファイル システム コントロール ファイル

ファイル システム コントロール ファイルである `fs.cntl` は、バックアップ処理から除外する、特定のワークステーションのファイル システム タイプをリストします。特定のファイル システム タイプを除外するには、`fs.cntl` ファイル内に 1 行ずつファイル システム タイプを入力します。

注: ファイル システム ファイルは、クライアント エージェント ワークステーション上の `uagent` のホーム ディレクトリに保存されます。

- ブラウザ環境設定ファイル

ブラウザ環境設定ファイルである `cabr.cfg` により、`raw` デバイスをブラウザに表示できます。 `cabr.cfg` ファイル内の独立した行に `raw` デバイスの絶対名が入力されていることを確認する必要があります。

- 共通エージェント環境設定ファイル

Common Agent 環境設定ファイルである `agent.cfg` は、システムにインストールした UNIX または Linux クライアント エージェントを確認します。このスクリプトは、`uagent` がインストールされると自動的に実行されます。

注: システム管理者のみが、ディレクトリ コントロール ファイルおよびファイル システム コントロール ファイルを編集できます。ただし、システム管理者がファイルに設定したアクセス権によっては、他のユーザでもファイルに内容を追加できる場合があります。

UNIX および Linux の Common Agent 環境設定ファイル

Common Agent (`caagentd` バイナリ)は、すべての UNIX、Linux、および Mac OS X クライアント エージェントの標準コンポーネントです。これは、UNIX、Linux、または Mac OS X クライアント エージェントの初めてのインストール中に自動的にインストールされます。

Common Agent は、`/opt/CA/ABcmagt` ディレクトリにあります。Common Agent は、`/opt/CA/ABcmagt` ディレクトリにある `agent.cfg` という環境設定ファイルを使用して、システム上にインストールしたクライアント エージェントを追跡します。

注: CA ARCserve Backup は、さまざまな UNIX および Linux プラットフォーム上の別々のディレクトリに Common Agent、ファイル システム エージェント、および Agent for Oracle 用の関連する環境設定ファイルをインストールします。詳細については、[「UNIX および Linux 用の Common Agent および Client Agent のインストール ディレクトリ」\(16 ページ\)](#)を参照してください。

クライアント エージェントを新規にインストールすると、`agent.cfg` ファイルは新しいクライアント エージェントの情報で更新されます。この環境設定ファイルは、通常は修正する必要がありません。このファイルを手動で修正する必要があるのは、一部のデバッグメッセージを有効にする場合、または Common Agent が実行されるデフォルト TCP/IP ポートを変更する場合のみです。

クライアント エージェントがインストールされた環境にある `agent.cfg` ファイルの例を以下に示します。

```
[0]
#[ABagntux]
NAME      ABagntux
VERSION   nn.nn.nn
HOME      /opt/CA/ABuagent
ENV       CA_ENV_DEBUG_LEVEL=4:$CA_ENV_DEBUG_LEVEL
ENV       LD_LIBRARY_PATH=/opt/CA/CAlib:/opt/CA/ABCmagt:$LD_LIBRARY_PATH
ENV       SHLIB_PATH=/opt/CA/CAlib:/opt/CA/ABCmagt:$SHLIB_PATH
ENV       LIBPATH=/opt/CA/CAlib:/opt/CA/ABCmagt:$LIBPATH
BROWSER   cabr
AGENT     uagentd
MERGE     umrgd
VERIFY    umrgd

[36] DISABLED
#[ABCmagt]
#NAME     ABCmagt
#HOME     /opt/CA/ABCmagt
#TCP_PORT 6051
#UDP_PORT 6051
```

Common Agent 環境設定ファイル構造

`agent.cfg` ファイルの各セクションには、バックアップ ネットワークで UNIX または Linux デバイスにインストールされたクライアント エージェントに直接対応する一連のフィールドが含まれます。すべてのフィールドは、クライアント エージェントのホームディレクトリを除き、あらかじめ定義されています。

クライアント エージェントのインストールおよび環境設定時に、環境変数 (ENV) フィールドも決定されます。ただし、必要に応じて環境変数フィールドの値を手動で入力することも可能です。`agent.cfg` ファイルの変更は、特定のデータベースに追加の環境フィールドを関連付ける必要がある場合など、特定の状況下でのみ行ってください。

注: `agent.cfg` ファイルの変更は、クライアント エージェント マシンの開始、終了、または再起動の後でのみ実行できます。

`agent.cfg` ファイルの例と各エージェント フィールドの説明を以下に示します。

ファイル内容	フィールドの説明
[0]	UNIX および Linux の、オブジェクト タイプ、ネットワーク上の特定のクライアント エージェントの定義済みの数
[4]	Mac OS X のオブジェクト タイプ、ネットワーク上の特定のク

ファイル内容	フィールドの説明
	クライアント エージェントの定義済みの数
NAME ABagntux	クライアント エージェントの名前
VERSION nn.n	クライアント エージェントのリリース番号およびバージョン番号
HOME /opt/CA/ABuagent	クライアント エージェントのデフォルトのホーム ディレクトリ
#ENV CA_ENV_DEBUG_LEVEL=4	クライアント エージェントに渡す環境変数
#ENV CAAGPERF_ENABLE=1	Solaris および HP システムでスナップショットおよび Direct I/O 機能を有効にします。詳細については、「スナップショットの設定および直接 I/O」のセクションを参照してください。
ENV LD_LIBRARY_PATH	Sun、Linux、および Tru64 での共有ライブラリの検索パス
ENV SHLIB_PATH	HP での共有ライブラリの検索パス
ENV LIBPATH	AIX での共有ライブラリの検索パス
BROWSER cabr	クライアント エージェントのブラウザ モジュール
AGENT uagentd	クライアント エージェント デーモンのバックアップ モジュール
MERGE umrgd	デーモンのマージ
VERIFY umrgd	デーモンのスキャン

クライアント エージェントのホーム ディレクトリ

クライアント エージェントのデフォルトのホーム ディレクトリ(ABuagent)は、インストールおよびセットアップ中に自動的に定義されます。ただし必要に応じて、別のホーム ディレクトリを指定することもできます。

ホーム ディレクトリの名前を指定するには、agent.cfg ファイルの ABagntux セクション以下を調べます。クライアント エージェントのホーム ディレクトリの名前は、HOME 変数により定義されます。

Common Agent のコンポーネント

Common Agent は、常にデーモンとして動作し、システム上にインストールされた UNIX、Linux、および Mac OS X クライアント エージェントの代わりに要求を受信待機します。各エージェントのインストール時に、BROWSER、AGENT、MERGE、および VERIFY の各コンポーネントが Common Agent の独立したセクションに登録されます。

エージェントによっては、これらのコンポーネントの一部のみを備えたものもあります。たとえば、サンプルの環境設定ファイルでは、UNIX または Linux 用のセクションに、**BROWSER** コンポーネントの **cabr**、**AGENT** コンポーネントの **uagentd**、および **MERGE** と **VERIFY** コンポーネントの **umrgd** が登録されています。同様に、他のクライアント エージェントは他の **BROWSER** コンポーネントおよび **AGENT** コンポーネントを使用します。

```
[0]
#[ABagtux]
NAME                ABagtux
VERSION             nn.nn.nn
HOME                /opt/CA/ABuagent
ENV                 CA_ENV_DEBUG_LEVEL=4:$CA_ENV_DEBUG_LEVEL
ENV                 LD_LIBRARY_PATH=/opt/CA/CAlib:/opt/CA/ABcmagt:$LD_LIBRARY_PATH
ENV                 SHLIB_PATH=/opt/CA/CAlib:/opt/CA/ABcmagt:$SHLIB_PATH
ENV                 LIBPATH=/opt/CA/CAlib:/opt/CA/ABcmagt:$LIBPATH
BROWSER             cabr
AGENT               uagentd
MERGE               umrgd
VERIFY              umrgd
```

ポート アドレスの設定

TCP および UDP のデフォルト ポートは 6051 です。この TCP ポートを使用して、バックアップ サーバ(cprocess)とクライアント エージェント間で通信とデータ転送が行われます。バックアップ マネージャのユーザ インターフェースでは、UDP ポートを使用してホストをブラウズします。

TCP ポートと UDP ポートのいずれか、または両方の環境設定を行う場合、以下の環境設定ファイルを CA ARCserve Backup サーバおよびクライアント エージェント側の両方で変更して、値を一致させる必要があります。

環境設定ファイルの名前は以下のとおりです。

- **CAPortConfig.cfg** - CA ARCserve Backup Windows サーバ用
- **agent.cfg** - クライアント エージェント

注: UNIX、Linux、およびの Mac OS X 環境設定ファイルに関する重要な情報については、「UNIX、Linux、および Mac OS X Client エージェント コントロール ファイル」を参照してください。

以下の例は、Windows サーバの環境設定ファイル(CAPortConfig.cfg)です。

```
#Hostname IP address (optional) TCP ポート UDP ポート
#myhost nnn.nnn.nnn.nnn 6051 6051
```

クライアント エージェントの環境設定ファイル(agent.cfg)の構文の例を以下に示します。

```
[36]
NAME      ABCmagt
HOME      /opt/CA/ABcmagt
TCP_PORT  7090
UDP_PORT  7085
```

Common Agent のポート番号

デフォルトでは、Common Agent は TCP および UDP の両方でポート番号 6051 を使用します。このデフォルトのポートを変更するには、agent.cfg ファイルの ABCmagt セクションに新しいポート番号を指定した後、caagent stop コマンドに続いて caagent start を入力して、Common Agent を再起動する必要があります。ポート番号の変更後に caagent の update コマンドを使用しないでください。

注: 通常の状態では、この方法で、Common Agent を開始または停止しないでください。代わりに、システムにインストールされている UNIX および Linux クライアント エージェントに用意されている start スイッチおよび stop スイッチを実行します。

以下は、スクリプトを変更前と変更後の環境設定ファイルの例です。

変更前:

```
[36]
#[ABcmagt]
#NAME          ABcmagt
#HOME          /opt/CA/ABcmagt
#TCP_PORT      6051
#UDP_PORT      6051
```

変更後:

```
[36]
#[ABcmagt]
NAME          ABcmagt
HOME          /opt/CA/ABcmagt
TCP_PORT      9051
UDP_PORT      9051
```

Common Agent を再起動しない限り、ポートの変更は有効になりません。デフォルトポート以外のポートで実行するように Common Agent の環境設定を行う場合、この Common Agent にアクセスできるように CA ARCserve Backup サーバを環境設定する必要もあります。これは、CAPortConfig.cfg ファイルにクライアント エージェントのエントリを追加することで実行できます。このファイルは、バックアップ サーバ上のホームディレクトリ の config サブディレクトリ \$BAB_HOME/config/port.cfg にあります。

デフォルトでは、Common Agent は他の UDP ポートである 0xA234 (41524)を使用して、UNIX、Linux、および Mac OS X クライアント エージェントに対する CA ARCserve Backup のオート ディスカバリ要求を受信します。このポートは設定不可です。

ホストと信頼関係にあるユーザの認証情報

Common Agent でユーザの認証情報を確認する場合は、ホストとの信頼関係が優先されます。UNIX または Linux システムでは、特定のユーザが特定のホストにアクセスする際に、認証情報を要求しないようにセットアップすることが可能です。このようなアクセスを可能にするには、それら特定のユーザ ID を/etc/hosts.equiv ファイルまたは rhosts ファイルに追加します。デフォルトでは、Common Agent はこれらの規則に従い、認証のためにユーザのパスワードを確認します。ホストとの信頼関係の確認を無効にするには、以下の例に示すように、agent.cfg ファイルで NO_HOSTS_EQUIV=1 環境変数を指定します。

```
[36]
#[ABcmagt]
NAME      ABcmagt
HOME      /opt/CA/ABcmagt
ENV       NO_HOSTS_EQUIV=1
```

必要に応じてアクセス コントロール リストを設定し、Common Agent を No Password モードまたは Single User モードにすることができます。ACL の詳細については、「[UNIX、Linux および Mac OS X のアクセス コントロール リスト](#)(53 ページ)」を参照してください。

Common Agent の接続要求の動作

クライアント エージェント セッションを開始するために、CA ARCServe Backup サーバは、UNIX、Linux、または Mac OS X クライアント エージェントとの接続を要求して、特定のバックアップ コンポーネント(BROWSER、BACKUP、または RESTORE など)を使用できるようにします。この要求を受信すると、Common Agent は接続を受け入れ、システムに対するユーザの認証情報を検証します。

ユーザの検証が終わると、Common Agent は、その特定のクライアント エージェントおよび指定されたコンポーネントに対応するエントリがあるかどうか、agent.cfg ファイルを確認します。クライアント エージェントおよび要求されたコンポーネントの両方の検証が完了しない限り、Common Agent はクライアント エージェントとコンポーネントを有効にしません。Common Agent は、新たな要求を待機する状態に戻ります。

環境設定可能なオプション

オプションを使用して、クライアント エージェントの操作を最適化およびカスタマイズできます。ただし、これらのどのオプションも、クライアント エージェントを実行するための必須オプションではありません。UNIX、Linux、Mac OS X のクライアント エージェントの開始時に使用可能なすべてのオプションを以下の表に示します。

注: これらのオプションは、UNIX または Linux の知識を持つ管理者が慎重に設定する必要があります。オプションやパラメータの意味を理解していない場合は、CA のテクニカル サポートの担当者より指示がない限り、これらの機能を設定しないでください。

オプション	詳細
-ALLOW <network address> <host address>	Single User モードでこのオプションに -S または -NOPASSWORD オプションを付けて使用すると、クライアント エージェントへのアクセスを検証なしで許可されたコンピュータの IP アドレスを定義できます。

```
-ALLOW N:172.16.0.0(255.255.255.0) H:172.31.255.255
```

この例では、N はネットワーク アドレス、H はホストの IP アドレスを示します。サブネットマスクを設定することもできます。

オプション	詳細
-b bufsize	ディスクの I/O バッファのサイズをバイト単位で定義します。16384 バイトから 65536 バイトの範囲で設定可能で、デフォルト値は 65536 バイトです。
-c n	待機中のスリープ時間をミリ秒(ms) 単位で指定します。0 ミリ秒から 1000 ミリ秒の範囲で設定可能で、デフォルト値は 50 ミリ秒です。
-CAUSER USER	Single User モードを定義します。-S または-NOPASSWORD オプションとともに使用して、ユーザごとに許可リストまたは禁止リストを設定します。

例:

```
-CAUSER A: USER1 N: USER2
```

この例では、A は-ALLOW、N は-DENY を意味します。

オプション	詳細
-DENY <network address> <host address>	Single User モードでこのオプションと一緒に-S または-NOPASSWORD オプションを使用すると、クライアント エージェントへのアクセスを許可されていないコンピュータの IP アドレスを定義できます。

例:

```
-DENY N:172.16.0.0(255.255.255.0) H:172.31.255.255
```

この例では、N はネットワーク アドレス、H はホストの IP アドレスを示します。サブネットマスクを設定することもできます。

オプション	詳細
-l	クライアント エージェントによって推奨ロックがチェックされます。デフォルト設定は、必須ロックのみ有効です。
-m maxbuf	I/O に割り当てられたバッファ数を設定します。2 から 1024 の範囲で設定可能で、デフォルト値は 128 です。
-NOPASSWORD	-ALLOW、-DENY、または-CAUSER のいずれかのオプションを使用する必要がある場合、このオプションを指定します。このオプションは、パスワードを必要としない Single User モードでの-S オプションと同じです。

オプション	詳細
-P n	コマンドの後に可変数 (n) を続けて、デフォルトのタイムアウトを指定します。タイムアウトは、ユーザが分単位 (0 ～ 10) で指定できます。デフォルトは 5 分です。

たとえば、**-P 10** オプションを指定すると、バックアップ スクリプトやリストア スクリプトを実行するまでの待ち時間が 10 分となります。

注: 変数 n を指定せずに **-P** オプションを使用すると、エラーが発生します。

オプション	詳細
-Prebackup filename	実行しているバックアップ ジョブまたはリストア ジョブに関連した、ジョブの前後に実行するデフォルトのスクリプトを指定します。ファイル名はオプションです。ファイル名が指定されていない場合は、uag_pre_backup をファイル名として使用します。
-Postbackup filename	
-Prerestore filename	
-Postrestore ファイル名	
-S	Single User モード オプションを有効にします。Single User モードでは、ユーザー認証で正規のユーザ ID およびパスワードを確認しません。代わりに、 -ALLOW 、 -CAUSER 、または -DENY オプションに応じてアクセスが許可されます。詳細については、「特定のオプション」を参照してください。
-s async nonblocking	ソケット I/O を非同期、非ブロック モードに設定します。
-s bufsize	ソケット バッファのサイズを指定します。4096 から 65536 の範囲で設定可能です。デフォルト値は、システムによって異なります。
-s SocketMode	バックアップ処理にソケット モードを使用するように指定します。
-sparse	スパース ファイルと通常ファイルの処理を区別します。このオプションにより、スパース ファイルのバックアップおよびリストア処理の効率が向上します。 注: クォータ ファイルは、 -sparse が指定されているかどうかに関係なく、バックアップおよびリストアの処理で常にスパース ファイルとして扱われます。
-verbose または -v	システムを冗長 (Verbose) モードにして、詳細なデバッグ メッセージをコンソールから入力できるようします。

UNIX のスナップショットおよび Direct I/O のサポート

UNIX クライアント エージェントでは、スナップショットおよび Direct I/O 機能がサポートされています。これらの機能を活用するには、UNIX クライアント エージェントを実行するマシン上に、以下のいずれかの環境が存在する必要があります。

機能	プラットフォーム	ソフトウェア要件
スナップショット	Solaris	fssnap パッケージがインストールされている UFS ファイル システム (Solaris8 および 9) または高度なバージョンの VxFS ファイル システム。
スナップショット	HP-UX 11.0	高度なバージョンの VxFS ファイル システムまたは Online Journaling File System (JFS)。
Direct I/O	Solaris	UFS ファイル システムまたは VxFS ファイル システム。
Direct I/O	HP-UX 11.0	高度なバージョンの VxFS ファイル システムまたは Online JFS。

スナップショットおよび Direct I/O の定義

Direct I/O を使用すると、クライアント エージェントで、高度なバージョンの VxFS、Online JFS (HP-UX)、および fssnap をインストールした Solaris の UFS 上のスナップショットを作成できます。クライアント エージェントは、ルート ボリュームに作成されている一時ディレクトリにマウントし、スナップショット バックアップを生成します。スナップショット バックアップの生成が完了した後、クライアント エージェントは一時ディレクトリをマウント解除し、スナップショットを削除します。

スナップショット バックアップを実行するには、スナップショット バッファを指定する必要があります。スナップショット バッファは、スナップされたボリュームで上書きされる前の、元のデータを保存するために使用するディスク領域です。スナップショット バッファを使用する場合は、以下の点に注意します。

- スナップショット バッファは、バックアップ処理中に容量が変化するスナップ ボリュームのすべてのデータを保存できる容量を持っている必要があります。スナップショット バッファの容量が不足すると、スナップショットが無効になり、バックアップに失敗します。
- スナップされたボリュームおよびスナップショット バッファが、同一のファイル システム上に存在しないように注意してください。
- スナップされたボリュームおよびスナップショット バッファを別の物理ディスクに配置すると、パフォーマンスが向上します。
- Solaris プラットフォームの UFS (fssnap 使用) の場合、スナップショット バッファにはファイル名、ディレクトリ名、または raw パーティションを指定できます。

Direct I/O のバックアップまたはリストアでは、クライアント環境をチェックし、環境設定ファイル `caagperf.cfg` を編集する必要があります。 `caagperf.cfg` ファイルに記述されたファイル システム上のスナップショットおよび Direct I/O を表示するには、バックアップまたはリストア ジョブをサブミットした後、コマンド ラインで `mount` コマンドを実行します。

スナップショットで、`mount` コマンドを実行後に表示される出力は、マウント ポイントが `SNAP_HOME_` というプレフィックスで始まる新規の読み取り専用ファイル システムです。 Direct I/O では、特定のファイル システムのマウント オプションの変更を監視できます。 `caagperf.cfg` ファイルのログ フラグを有効にしている場合は、`caagperf.log` ファイルの詳細なメッセージを表示することもできます。

以下のセクションでは、これらの機能を使用できるように UNIX クライアント エージェントを環境設定する方法について説明します。

スナップショットおよび Direct I/O の設定

スナップショットおよび Direct I/O 機能を設定するには、以下の手順に従います。

1. `agent.cfg` ファイルに以下の行を追加して、環境変数 `CAAGPERF_ENABLE` を有効にします。

```
ENV CAAGPERF_ENABLE=1
```

注: `agent.cfg` ファイルは、`/opt/CA/ABcmagt` ディレクトリにあります。

この環境変数を有効にすると、`agent.cfg` ファイルのクライアント エージェントのセクションは、以下のようになります。

```
[0]
NAME          ABagentux
VERSION       nn.nn.nn
HOME          /opt/CA/uagent
ENV           LD_LIBRARY_PATH=/usr/local/Calib:/opt/CA/ABcmagt
ENV           CAAGPERF_ENABLE=1
```

2. `/opt/CA/ABcmagt` ディレクトリに、`caagperf.cfg` という名前の設定ファイルを作成します。特定のファイル システムで実行する操作の種類を、`caagperf.cfg` ファイルで指定する必要があります。詳細については、この次のセクションを参照してください。

テーブル パラメータおよび値の設定

設定ファイルのフォーマットは、Windows の .inf ファイルと同じで、セクションおよびキーと値のペアから構成されます。セクション名は角かっこで囲まれた名前です。キーと値のペアは **KEY=VALUE** のフォーマットで、各行に 1 つのペアが記述されます。環境設定ファイル内のすべてのエントリは、大文字と小文字が区別されます。

キーと値のペアは、それらが属するボリュームの下にあり、セクション名がボリューム名になっています。caagperf.cfg ファイルのセクション名の構文の例としては、[]または [/export/home]の 2 つがあります。ボリュームに複数のエントリがある場合、クライアントエージェントの動作は未定義です。

キーと値のペアを使用して、それらが属するボリュームのパラメータを設定します。デフォルトでは、すべてのオプションが無効になっています。ボリュームに特殊な処理が必要ない場合は、caagperf.cfg ファイルに記述する必要はありません。

以下の表で、キーと値について説明します。

キー	値
DOSNAP	ボリューム上でスナップショット機能を有効にします。値を BACKUP に設定します。これは、バックアップ処理中にスナップショットを取得する必要があることを示します。
SNAPSHOTBUFFER	<p>スナップされたボリュームで上書きされる前の、元のデータを保存するために使用するバッファを指定します。値をファイル名またはパーティションに設定します。このファイルは、別のボリュームにあるファイルまたはディレクトリでもかまいません。</p> <p>このフィールドの値は、ファイル システム タイプによって異なります。高度なバージョンの VxFS または Online JFS の場合、値は空のパーティションの名前となります。UFS の場合、値はファイル名、ディレクトリ名またはパーティション名となります。</p>
DOUBIO	ボリューム上で Direct I/O 機能を有効にします。値は、 BACKUP 、 RESTORE 、および BACKUP_RESTORE です。このフィールドの値は、バックアップ要件またはリストア要件によって異なります。

以下に設定ファイルの例を示します。

UNIX システム用設定ファイル

UNIX システム設定ファイルのさまざまなバリエーションの例は次のとおりです。

例: fssnap がインストールされた UFS ファイル システムを使用した Solaris 8 または Solaris 9 オペレーティング システム

ファイルの 1 行目は、デバッグ フラグです。デバッグ エントリの下に 3 つのセクションは、ディスク上の /opt、/export/home、および/ ボリュームに対応します。

/opt および /export/home セクションでは、バックアップ中のスナップショットを有効にし、/ セクションではバックアップおよびリストア処理で Direct I/O を有効にしています。

```
##DEBUG
[/opt]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/garbage/snapbufferfile_1

[/export/home]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/garbage/snapbufferfile_2

[/]
DOUBIO=BACKUP_RESTORE
```

例: 高度なバージョンの VxFS ファイル システムをインストールした Solaris 8 オペレーティング システム

ファイルには 3 つのセクションがあります。ファイルの 1 行目は、デバッグ フラグです。ファイルの 3 つのセクションは、/opt、/export/home、および/ ボリュームです。/opt および /export/home セクションではバックアップ中のスナップショットを有効にし、/ ボリュームではバックアップおよびリストア処理で Direct I/O を有効にしています。

```
T##DEBUG
[/opt]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/dev/dsk/c0t0d0s4

[/export/home]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/dev/dsk/c0t0d0s4

[/]
DOUBIO=BACKUP_RESTORE
```

例: 高度なバージョンの VxFS ファイル システムまたは Online JFS ファイル システムをインストールした HP-UX オペレーティング システム

ファイルには 4 つのセクションがあります。ファイルの 1 行目は、デバッグ フラグです。ファイルのセクションは、/, /var、/usr、および/export ボリュームです。このファイルでは、/ ボリュームではバックアップおよびリストア処理中の Direct I/O を有効にし、他のボリュームではバックアップ中のスナップショットを有効にしています。

```
##DEBUG
[/]
DOUBIO=BACKUP_RESTORE

[/var]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/dev/vg00/1vo17

[/usr]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/dev/vg00/1vo17

[/export]
DOSNAP=BACKUP
SNAPSHOTBUFFER=/dev/vg00/1vo17
```

AS/400 Enterprise Option のトレース レベル

CA のテクニカル サポートの指示に基づいて、AS/400 Enterprise Option について記録されるアクティビティのレベルを変更することができます。トレース レベルはバックアップ パフォーマンスに影響する可能性があるため、CA のテクニカル サポートからの特別な指示がない限り、値を変更しないでください。

AS/400 Enterprise Option のすべてのトレース レベルを以下の表に示します。

レベル	説明
ASO\$TRACE	クライアント エージェントのトレースの詳細を制御します。有効な値は、-1 と 0~0xFFFFFFFF です。ASO\$TRACE を -1 に設定すると、最も詳細な情報が記録されます。
ASO\$TRACE_AST	切り替え式のパラメータです。定義すると、Asynchronous System Trap (AST) がトレースされます。
ASO\$TRACE_IDENT	フォーマット パラメータです。推奨値は 0~5 です。デフォルト値は 3 です。
ASO\$TRACE_DATA	各パケットに記録されるバイト数を制御します。範囲は無制限で、0 から始まります。デフォルト値は 300 です。

UNIX および Linux のアクセス コントロール リスト

UNIX、Linux、および Mac OS X のクライアント エージェントの場合、ACL は Single User モードでのみサポートされています。このモードはパスワードなしモード (No Password Mode) と呼ばれます。UNIX、Linux、および Mac OS X のクライアント エージェント(または、データベース バックアップ エージェント)の場合、Common Agent の環境設定ファイル `agent.cfg` (`/opt/CA/ABcmagt` にあり)の対応するセクションに `NOPASSWORD` エントリを指定すると、Single User モードに設定できます。UNIX および Linux Agent の場合は、`uag.cfg` で `-S` オプションまたは `-NOPASSWORD` オプションを指定した場合も、Single User モードに設定できます。UNIX、Linux、および Mac OS X のクライアント エージェントでは、以下の 2 つの種類の ACL を使用できます。

例: ユーザの許可または拒否

アクセス コントロール リストで特定のユーザに対してバックアップまたはリストアを許可または拒否することができます。以下に `agent.cfg` ファイルの一部を例として示します。ACL を他のクライアント エージェントにも適用するには、それらのクライアント エージェント セクションを同様に変更する必要があります。

```
[0]
NAME ABagentux
VERSION nn.n.n
HOME /opt/CA/ABuagent
NOPASSWORD
CAUSER A:CAUSER1 N:CAUSER2
```

`NOPASSWORD` で Single User モードを有効にし、`CAUSER` で許可を付与または拒否するユーザを指定します (A は ALLOW、N は DENY を意味します)。A:CAUSER1 と指定すると、CAUSER1 はジョブを実行でき、N:CAUSER2 と指定すると、CAUSER2 に対してアクセスを拒否します。

注: Unix および Linux クライアント エージェントの場合、オブジェクト タイプは[0]です。Mac OS X クライアント エージェントの場合、オブジェクト タイプは[4]です。

例: IP アドレスによるシステムへのアクセス

アクセス コントロール リストにより、特定の IP アドレスでシステムにアクセスできるかどうかを判断できます。以下に `agent.cfg` ファイルの一部を例として示します。ACL を他のクライアント エージェントにも適用するには、ファイル内でそれらのエージェント セクションを同様に変更する必要があります。

```
[0]
NAME ABagentux
VERSION nn.n.n
HOME /opt/CA/ABuagent
NOPASSWORD
ALLOW N:172.16.0.0(255.255.255.0) H:172.31.255.255
DENY N:192.168.0.0(255.255.255.0) H:192.168.255.255
```

NOPASSWORD で Single User モードを有効にし、ALLOW および DENY を使用して、特定のネットワークや IP アドレスからシステムへのアクセスを許可するかどうかを指定します。N はネットワーク アドレス、H はホストの IP アドレスを示します。

注: 任意でサブネット マスクを使用することもできます。サブネット マスクは括弧で囲みます。

UNIX および Linux クライアント エージェントでは特定のタイプの ACL を `uag.cfg` で指定できるほか、`-S`、`-NOPASSWORD`、`-CAUSER`、`-ALLOW`、および `-DENY` オプションを使用して指定することもできます。これらのオプションの詳細については、「設定可能なオプション」を参照してください。

両方の種類の ACL を同時に適用できます。いずれの場合も DENY が ALLOW よりも優先します。Single User モードでは、クライアント エージェントのすべての処理がシステム管理者 (root ユーザ) 権限で実行されます。`caagentd.log` には、Single User モード中に拒否されたユーザ アドレス、IP アドレス、およびネットワーク アドレスに関する情報が含まれています。

UNIX および Linux でのアクセス コントロール リストのバックアップおよびリストア

CA ARCserve Backup Client Agent for UNIX、CA ARCserve Backup Client Agent for Linux、および CA ARCserve Backup Client Agent for Mainframe Linux では、Linux クライアント エージェントを使用してバックアップした Linux システムにあるファイルおよびディレクトリのアクセス コントロール リスト (ACL) をバックアップおよびリストアします。Linux の拡張属性もバックアップされます。管理者は、ACL を使用して、ファイルおよびディレクトリへのアクセスを詳細に制御することができます。Linux クライアント エージェントでは、各ファイルおよび各ディレクトリの ACL の読み取りおよび設定を行うことができます。

ACL ライブラリの検証

必要な ACL ライブラリがインストールされているかどうかを確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
>rpm -qa |grep libacl
```

libacl-devel-* パッケージまたは libacl-* パッケージがリストされない場合は、これらをインストールする必要があります。

ACL ライブラリ パッケージのインストール

ACL ライブラリ パッケージをインストールする方法

1. 以下の ACL ライブラリ パッケージを Linux システムに CD イメージからコピーするかインターネットからダウンロードします。

- libacl パッケージ(libacl-2.2.3-1.rpm など)
- libacl-devel パッケージ(libacl-devel-2.3.3-1.rpm など)

2. パッケージをインストールするには、以下のコマンドを実行します。

```
rpm -ivh <libacl-package-name>
rpm -ivh <libacl-devel-package-name>
```

たとえば、以下のように指定します。

```
>rpm -ivh libacl-2.3.3-1.rpm
>rpm -ivh libacl-devel-2.3.3-1.rpm
```

これにより、libacl.so ライブラリ が Linux システムにインストールされます。

Linux クライアント エージェントが 32 ビット Linux システムで実行されている場合は、これで ACL サポートが有効になります。Linux クライアント エージェントが 64 ビット Linux システムで実行されている場合は、libacl.so ライブラリが 32 ビット バージョンであることを確認してください。バージョンを確認し、必要に応じて 32 ビット ライブラリへのリンクを作成します。

Linux ACL ライブラリ バージョンの検証

バージョンを確認するには、libacl.so のインストール ディレクトリに移動します。

Linux ACL ライブラリ バージョンの検証

1. 「Run ls -l /libacl.so」を実行して、libacl.so がリンクしているターゲット ライブラリ ファイルを表示します。
2. ライブラリ ファイル名を使用して、libacl.so<-linking-target-library>ファイルを実行します。

libacl.so が 32 ビット バージョンまたは 64 ビット バージョンのどちらをポイントしているかが示されます。

32 ビットの Linux ACL ライブラリへのリンクの作成

libacl.so が 64 ビット ライブラリをポイントしている場合は、32 ビット ライブラリから libacl.so へのリンクを作成する必要があります。以下に、64 ビット Mainframe Linux プラットフォームでリンクを作成する例を示します。

```
> cd /lib  
> ln -sf libacl.so.1 libacl.so
```

使用している 64 ビット Linux システムに応じて、適切なリンク コマンドを実行してください。

AS/400 Enterprise Option の設定

AS/400 Enterprise Option の開始および停止の設定は、STRASO および ENDASO を使用して設定します。

開始設定

ライブラリ レベル バックアップの設定を行って、AS/400 Enterprise Option を拡張することができます。

開始設定を行う方法

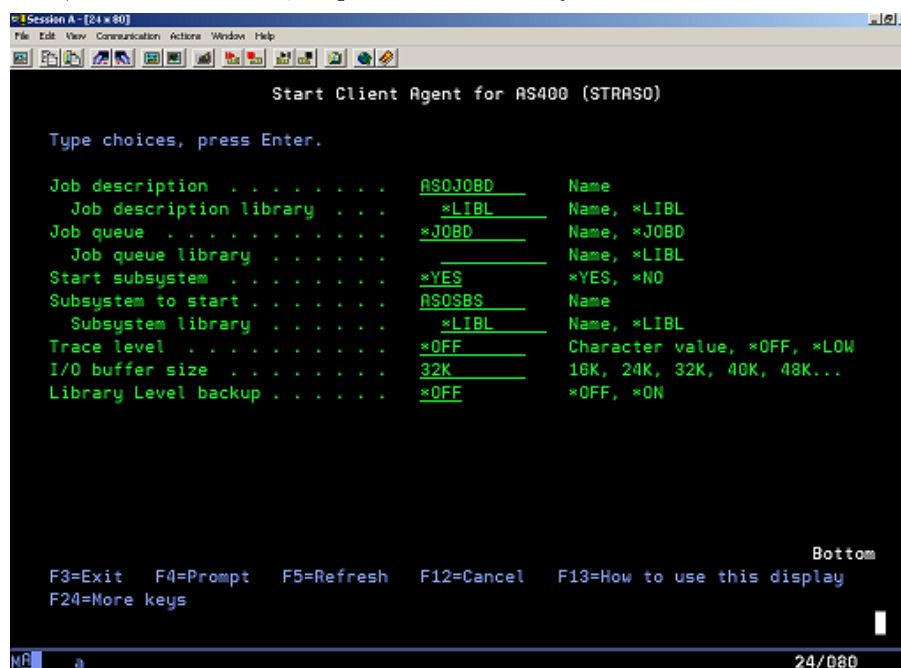
1. コマンド ラインで以下を入力します。

straso
2. F4 キーを押します。

使用可能なオプションが表示されます。

3. 環境設定を入力し、Enter キーを押します。

注: Library Level Backup および Use QaneSava 用の環境設定は変更することができます。これらの環境設定によって、パフォーマンスが向上します。詳細については、「パフォーマンスの設定」を参照してください。



実行環境設定

デフォルトでは、Use QaneSava および Library Level Backup の両方が *ON に設定されています。これらの設定によって、ライブラリ レベル バックアップのエージェントのパフォーマンスが向上します。

Use QaneSava フラグを使用して、*ON および *OFF を切り替えます。Use QaneSava フラグを *ON に設定すると、バックアップが一時 SAVF ファイルを作成することなく実行されます。フラグを *OFF に設定すると、バックアップが実行され、一時 SAVF ファイルが作成されます。

Library level backup フラグを使用して、ライブラリのバックアップを制御します。Library level backup フラグを *ON に設定すると、SAVLIB コマンドがライブラリ オブジェクトに適用されます。SAVLIB コマンドは、ライブラリ情報とライブラリ内の全ファイルの両方を 1 つのバックアップに保存するので、パフォーマンスが向上します。[Library Level Backup]機能は、複数のライブラリのバックアップ時に特に便利です。

フラグを ***OFF** に設定すると、**SAVOBJ** コマンドが使用され、ライブラリ内の各ファイルが個別にバックアップされます。ライブラリ全体のバックアップを行わない場合は、この方法を採用してください。

注: ライブラリ レベル バックアップ機能では、増分および差分バックアップはサポートされていません。

停止設定

必要に応じて、AS/400 Enterprise Option の停止設定を行うことができます。

停止設定を行う方法

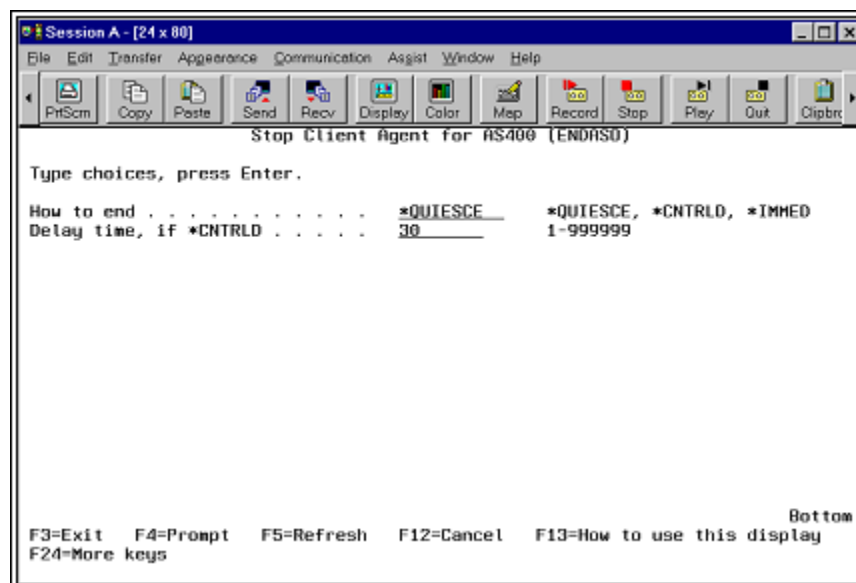
1. コマンド ラインで以下を入力します。

endaso

2. F4 キーを押します。

環境設定画面にオプションが表示されます。

3. 環境設定を入力し、Enter キーを押します。



OpenVMS Enterprise Option の設定

OpenVMS Enterprise Option のインストール後、ポート アドレス以外に追加の設定を行う必要はありません。

ポート アドレスの設定

デフォルトの TCP ポートおよび UDP ポートのアドレスは両方とも 6050 です。TCP ポートは、cprocess とクライアント エージェント間の通信およびデータ転送に使用されます。CA ARCserve Backup では、UDP ポートを使用してホストをブラウズします。

TCP ポートまたは UDP ポートの設定を行う場合は、bab\$startup.com ファイルに以下のコマンドを記述します。

```
DEFINE /SYSTEM ASO$PORT_NUMBER nnnn
```

この例では、nnnn はバックアップ マネージャのポート番号です。

重要: OpenVMS では、UDP ポートと TCP ポートの両方に同じポート番号を割り当てる必要があります。

TCP/IP スタックの最適化

TCP/IP スタックの設定は、クライアント エージェントのパフォーマンスに影響を与えます。通常、TCP Send および Receive クォータは 4096 に設定されます。これらの値を、OpenVMS システムにインストールしたスタックで許容可能な最大値に設定します。

OpenVMS Enterprise Option のトレース レベル

弊社のテクニカル サポートの指示に基づいて、OpenVMS Enterprise Option について記録されるアクティビティのレベルは変更することができます。トレース レベルはバックアップ パフォーマンスに影響する可能性があるため、CA のテクニカル サポートからの特別な指示がない限り、値を変更しないでください。

レベル	【説明】
ASO\$TRACE	クライアント エージェントのトレースの詳細を制御します。有効な値は、-1 と 0 ～0xFFFFFFFF です。ASO\$TRACE を -1 に設定すると、最も詳細な情報が記録されます。
ASO\$TRACE_AST	切り替え式のパラメータです。定義すると、Asynchronous System Trap (AST) がトレースされます。
ASO\$TRACE_IDENT	フォーマット パラメータです。推奨値は 0～5 です。デフォルト値は 3 です。
ASO\$TRACE_DATA	これは、ログに記録される各パケットのバイト数を制御します。範囲は無制限で、0 から始まります。デフォルト値は 300 です。

第 4 章：クライアント エージェントの使用法

この章では、クライアント エージェントを停止および開始する方法、通常のバックアップ環境でクライアント エージェントのバックアップ ジョブおよびリストア ジョブを開始する方法の詳細について説明します。

このセクションには、以下のトピックが含まれています。

[Runtime Statistics](#) (61 ページ)

[アクティビティ ログ](#) (62 ページ)

[Windows ネットワーク サーバのデータのバックアップ](#) (65 ページ)

[Client Agent の開始と停止の手順](#) (65 ページ)

Runtime Statistics

Windows と NetWare のクライアント エージェント ラインタイム コンポーネントでは、リアルタイムの統計情報が提供され、バックアップ ジョブおよびリストア ジョブの処理進行状況が表示されます。

注: Runtime Statistics は、Windows と NetWare でのみ表示可能です。

Client Agent for Windows の Runtime Statistics の表示

CA ARCserve Backup では、Client Agent for Windows を実行中のコンピュータに関する Runtime Statistics を表示できます。

Client Agent for Windows の Runtime Statistics を表示する方法

1. Windows の [スタート]-[すべてのプログラム]-[CA]-[ARCserve Backup]-[Backup Agent 管理]をクリックします。
[Backup Agent 管理]が開きます。
2. [接続]を選択します。

CA ARCserve Backup によって、処理された最後の 32 個のジョブが表示されます。

ジョブがアクティブの場合、そのジョブをクリックすると現在の Runtime Statistics を表示できます。ジョブが完了している場合は、そのジョブの完了した統計が表示されます。

注: 統計はメモリ内に保存されます。そのため、ユーザが Backup Agent 管理および Universal Agent サービスを閉じると、接続の統計が失われます。ただし、アクティビティ ログから引き続きジョブの結果を参照できます。

NetWare クライアント エージェントのリアルタイム モニタの表示

NetWare クライアント エージェントで[Runtime]ウィンドウが表示されていない場合は、画面を切り替えて表示する必要があります。リモート コンソール(RCONSOLE.EXE)を実行してサーバ コンソールを表示している場合、Alt キーと F3 キーを同時に押し、[Runtime]ウィンドウが開くまでこれらのキーを押したままにします。サーバ コンソールを表示している場合、Alt キーと Esc キーを同時に押して画面を切り替えます。

注: Ctrl キー と ESC キー を同時に押して現在の画面のリストを表示すると、[Runtime]ウィンドウを選択できます。

アクティビティ ログ

サーバ ベースの CA ARCserve Backup システムでは、アクティビティ ログが生成されます。アクティビティ ログには、クライアント エージェントが処理するすべてのジョブに関する情報が表示されます。以下のセクションでは、サーバ サイドおよびクライアント サイドのアクティビティ ログを各クライアント エージェントで表示する方法について説明します。

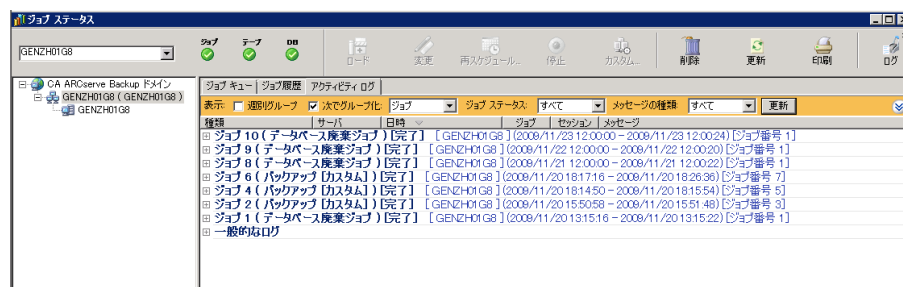
Windows Server でのアクティビティ ログの表示

Windows の CA ARCserve Backup サーバでアクティビティ ログを表示する方法

1. CA ARCserve Backup マネージャ コンソールの[クイック スタート]メニューから [ジョブ ステータス]を選択します。

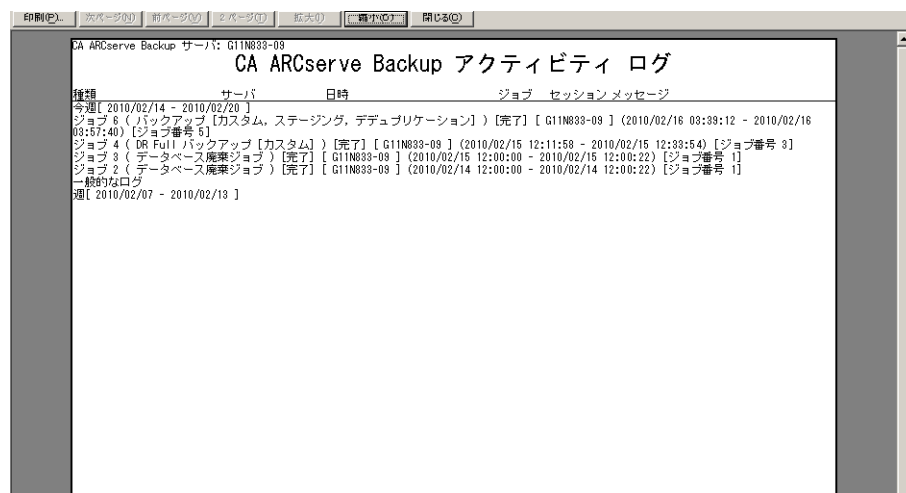
ジョブ ステータス マネージャが表示されます。

[アクティビティ ログ]タブをクリックして、以下の例のようにログのリストを表示します。



2. [ジョブ ステータス]メニューから、[アクティビティ ログ]-[印刷プレビュー]を選択します。

以下の画面で示すように、クライアント エージェント アクティビティ ログ ファイルの印刷プレビューの出力が表示されます。



NetWare クライアント エージェント マシンでのアクティビティ ログの表示

NetWare クライアント エージェントは `nwagent.log` にログを書き込みます。このファイルはクライアント エージェントのホーム ディレクトリに作成されます。Windows エクスプローラでクライアント エージェントのホーム ディレクトリのファイルを開くと、このログを表示できます。または、コンソールで[View NWAGENT.LOG]を選択しても、ログ ファイルの内容を表示できます。

UNIX または Linux クライアント エージェント マシンでのアクティビティ ログの表示

UNIX または Linux クライアント エージェントが開始されると、ただちに `uag.log` というアクティビティ ログ ファイルが作成され、ログ ディレクトリに保存されます。ログ ファイルのディレクトリは、クライアント エージェントのホーム ディレクトリ(デフォルトのパスは`¥¥BABuagent`)以下の `log` ディレクトリにあります。

`uag.log` ファイルは、マシンのバックアップ ジョブおよびリストア ジョブの実行中に発生するすべてのアクティビティおよびエラーを記録します。ログ画面では、各ジョブは番号順に並べられ、日付および時刻でも識別できます。

クライアント エージェント マシン上で、`print filename` コマンドを使用して、これらのログの内容を表示できます。

注: Common Agent に関連するメッセージはすべて `/opt/CA/ABcmagt/logs/caagentd.log` ファイルに保存されます。

AS/400 Enterprise Option を実行しているコンピュータのアクティビティ ログ

Enterprise Option for AS/400 では、CA ARCserve Backup ライブラリ内にログ ファイルが作成されます。以下の 2 つのファイル メンバがあります。

- AGENT.MBR: エージェントの処理に関連するアクティビティおよびエラーが記録されます。
- ASBR.MBR: CA ARCserve Backup のブラウズ アクティビティの情報が記録されます。

OpenVMS Enterprise Option を実行しているコンピュータのアクティビティ ログ

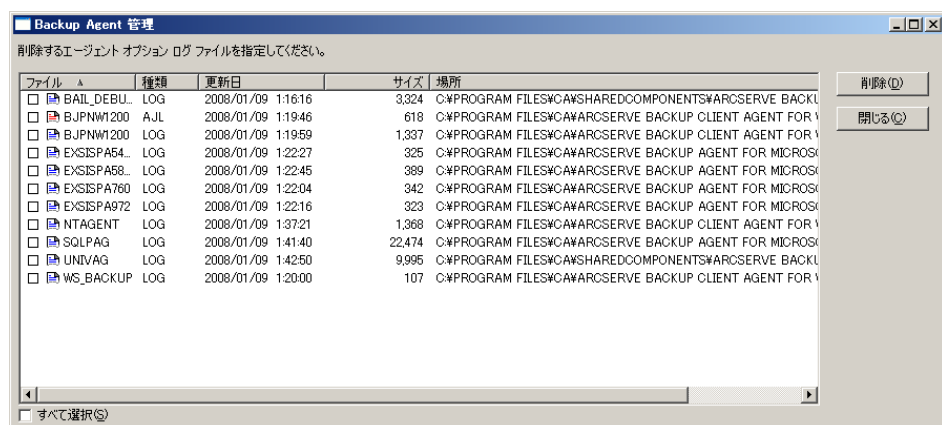
サーバでエージェントの実行が開始されると、CA ARCserve Backup はただちにアクティビティ ログ ファイル `aso$agent_<nodename>.log` を生成し、ログ ディレクトリに保存します。ジョブ番号、日付、および時刻で識別される新規のログ ファイルは、各ジョブおよびそれに続くエージェントの各実行に対して作成されます。各ログ ファイルの内容は、エージェントで有効になっているトレース レベルによって決まります。

Client Agent ログ ファイルの削除

UNIX および Linux のクライアント エージェントでは、マシン上で通常のファイルを削除するのと同じ方法で、ログ ファイルをクライアント マシンから削除できます。たとえば、以下のコマンドを実行します。

```
$>rm uag.log
```

Windows クライアント エージェントの場合、[Backup Agent 管理]を使用してログ ファイルを削除します。[オプション]メニューの[Client Agent ログ ファイルの削除]を選択します。以下のように、削除するログ ファイルを選択して[削除]をクリックします。



Windows ネットワーク サーバのデータのバックアップ

Windows サーバにクライアント エージェントをインストールした場合、クライアント エージェントを介してそのサーバのデータをバックアップすることができます。

Windows ネットワーク サーバのデータをバックアップする方法

1. バックアップ マネージャを開きます。
2. [ソース]タブをクリックします。
3. [ネットワーク]オブジェクトを展開してから[Windows システム]ネットワーク オブジェクトを展開し、クライアント マシンを特定します。
4. クライアント マシンを右クリックします。コンテキスト メニューから[エージェントの使用]を選択します。
5. [エージェントの使用]チェックボックスをオンにします。
6. プロトコルを選択します。[IP アドレス]にクライアント コンピュータのアドレスを入力するか、[コンピュータの名前解決]を選択してクライアント エージェントで IP アドレスを決定するように指定します。
7. [OK]をクリックします。
これで、クライアント エージェントが選択されました。
8. セキュリティ情報を要求されたら、対象サーバの認証情報を入力します。

Client Agent の開始と停止の手順

以下のセクションでは、各種のクライアント エージェントを開始および停止する手順について説明します。

注: バックアップまたはリストア ジョブの処理中にクライアント エージェントが停止すると、ジョブが失敗します。その場合は、ジョブの処理を最初からやり直す必要があります。

Windows の開始と停止の要件

Windows クライアント エージェントでは、**Universal Agent** という共通コンポーネントを使用します。**Universal Agent** は インストール中にインストールまたは自動更新されます。**Universal Agent** は、自動的に開始するサービスとしてシステムに登録され、デフォルトではローカルシステム アカウントで実行されます。サービスが開始すると、**Windows** クライアント エージェントがロードされます。**Windows** クライアント エージェントは、ユーザがシステムにログオンしていなくても使用できます。

Backup Agent 管理を使用して、Windows クライアント エージェントを開始または停止してください。[Backup Agent 管理]は、クライアント エージェントの活動を監視し、Universal Agent サービスが停止した場合の予期せぬジョブの障害を防止します。

Windows Client Agent の開始と停止

Windows Client Agent の開始/停止方法

1. [Backup Agent 管理]ウィンドウを開きます。
2. [オプション]メニューから[サービス]を選択します。
3. (オプション)コンピュータの起動時にクライアント エージェントを自動的に開始しないようにするには、[システムの起動時に Backup Agent サービスを開始する]オプションをオフにします。
4. サービスを開始するには青い矢印が描かれているボタン、停止するには赤い四角形が描かれているボタンをそれぞれクリックします。

注：サービスを停止すると、Universal Agent を使用する他のコンポーネントに影響します。

5. Backup Agent サービス マネージャを閉じます。

NetWare の開始と停止の要件

NetWare クライアント エージェントのインストール処理により、NWAGENT.NCF と呼ばれる NCF ファイルが作成されます。クライアント エージェントを開始する前に、このファイルが作成されていて、NetWare サーバの SYS ボリュームにある SYSTEM ディレクトリに正しく保存されていることを確認してください。

NetWare クライアント エージェントの開始

NetWare クライアント エージェントを開始するには、リモート サーバのコンソール プロンプトに以下のコマンドを入力します。

```
nwagent
```

NetWare クライアント エージェントには CSLOADER.NLM というモジュールが含まれており、いくつかのモニタ機能を実行します。NetWare クライアント エージェントを開始すると、CSLOADER.NLM も起動します。CSLOADER.NLM は、この結果をメッセージとして画面に表示し、ログ ファイルにも記録します。これらのメッセージは、問題の原因を追跡する場合に役立ちます。

また、CSLOADER.NLM は Pre Flight Check (PFC.NLM)と共に動作します。PFC.NLM はクライアント エージェントを実行する環境の確認を行う NLM です。環境が要求を満たしていない場合、この確認メカニズムによって CSLOADER.NLM に情報が送信され、ロードが停止します。

NetWare クライアント エージェントの停止

NetWare クライアント エージェントを停止するには、NetWare サーバのコンソール プロンプトに以下のコマンドを入力します。

```
unload nwagent
```

UNIX および Linux クライアント エージェントの開始と停止

クライアント エージェントを開始する前に、クライアント エージェントの環境設定が完了していることを確認します。クライアント エージェントの環境設定を行っていない場合、以下のスクリプトを実行します。

```
#abuagent/uagentsetup
```

上記の例では、**abuagent** はエージェントのホーム ディレクトリのフル パスを表しています。デフォルトのパスは **/opt/CA/ABuagent** です。

UNIX および Linux クライアント エージェントの開始

UNIX または Linux クライアント エージェントをインストールすると、クライアント エージェントは自動的に開始されます。

エージェントのステータスをチェックするには、コマンド ラインで以下のコマンドを入力します。

```
# uagent status
```

エージェントを開始するには、コマンド ラインで以下のコマンドを入力します。

```
# uagent start
```

エージェントが有効ではない場合は、環境設定スクリプトの **uagentsetup** を実行します。

UNIX および Linux クライアント エージェントの停止

UNIX、Linux、Mac OS X のクライアント エージェントを停止するには、**root** としてログインし、コマンド ラインで以下のコマンドを入力します。

```
# uagent stop
```

Common Agent の開始と停止のステータス

クライアント エージェントを開始または停止すると、UNIX または Linux システムのスクリプトによって `agent.cfg` ファイルが変更され、クライアント エージェント エントリが有効または無効とマークされます。また、このスクリプトは変更内容について **Common Agent** に通知します。**Common Agent** は、環境設定ファイル内でまだ有効となっているエントリの数に応じて、実行し続けるかどうかを決定します。

たとえば、Linux クライアントに `uagent stop` を発行すると、**ABagntux** セクションが無効となります。**ABagntux** セクションがファイル内の唯一のセクションである場合（つまり、インストールされている **CA ARCserve Backup** クライアント エージェントが 1 つのみの場合）、**Common Agent** は停止します。その後、`agent.cfg` ファイルの **ABagntux** セクションを有効にするために、`uagent start` を発行する必要があります。

`uagent start` コマンドを入力すると、**Common Agent** のステータスが無効から有効に変更されます。特定のクライアント エージェントが開始または停止すると、スクリプトはそれに応じて `agent.cfg` ファイルを修正し、**Common Agent** に通知します。その時点で、**Common Agent** は、環境設定ファイル内でまだ有効となっているセクションの数に応じて、実行し続けるかどうかを決定します。

UNIX および Linux クライアント エージェントのステータスの確認

UNIX および Linux クライアント エージェントのステータスを確認するには、`root` としてログインし、コマンド ラインで以下のコマンドを入力します。

```
# uagent status
```

このコマンドがエラーになる場合は、クライアント エージェントの環境設定が必要な場合があります。クライアント エージェントを環境設定するには、以下のスクリプトを実行します。

```
#abuagent/uagentsetup
```

上記の例では、`abuagent` はエージェントのホーム ディレクトリのフル パスを表しています。デフォルトのパスは `/opt/CA/ABuagent` です。

Enterprise Option for AS/400 の開始と停止の要件

クライアント エージェントを開始または停止するには、`*JOBCTL` (ジョブ コントロール) 権限が必要です。

Enterprise Option for AS/400 のクライアント エージェントの開始

エージェントを開始するには、AS/400 にログオンし、コマンド ラインで以下のコマンドを使用します。

```
straso
```

Enterprise Option for AS/400 のクライアント エージェントの停止

エージェントを停止するには、AS/400 にログオンし、コマンド ラインで以下のコマンドを使用します。

```
endaso
```

Enterprise Option for OpenVMS の開始と停止の要件

クライアント エージェントが置かれている OpenVMS マシンを操作できる適切なネットワーク認証情報があることを確認してください。

Enterprise Option for OpenVMS のクライアント エージェントの開始

エージェントを起動するには、システムとしてログインし、コマンド ラインで以下のコマンドを実行します。

```
@sys$startup:bab$startup.com
```

Enterprise Option for OpenVMS のクライアント エージェントの停止

エージェントを停止するには、システムとしてログインし、コマンド ラインで以下のコマンドを実行します。

```
@sys$startup:bab$shutdown.com
```

Enterprise Option for OpenVMS のクライアント エージェントのステータスの確認

クライアント エージェントのステータスを確認するには、ログインし、コマンド ラインで以下のコマンドを実行します。

```
show sys /proc=aso$*
```


索引

3

32 ビットのライブラリから libacl へのリンクの作成
- 58

A

ABuagent/uagentsetup コマンド - 72

ACL ライブラリ

32ビット Linux - 57

Linux libacl.so - 57

パッケージ - 57

要件 - 57

agent.cfg

クライアント エージェント環境設定ファイル - 45

AS/400

endaso コマンド - 61

straso コマンド - 74

環境設定 - 58

ジョブ コントロール権限 - 73

ライブラリ レベルのバックアップ機能 - 59

AS/400 のジョブ コントロール権限 - 73

ASCONFIG.INI - 38

B

bab\$shutdown.com OpenVMS コマンド - 74

bab\$startup.com OpenVMS コマンド - 74

C

caagent

start コマンド - 45

stop コマンド - 45

update コマンド - 45

caagentd

Common Agent のバイナリ - 41

Common Agen のログ ファイル - 68

caagperf.cfg 環境設定ファイル - 50, 52

caagperf.log ファイル - 50

cabr.cfg ブラウザの環境設定ファイル - 40

CAPortConfig.cfg

環境設定ファイル - 45

例 - 31

Common Agent

agent.cfg - 41

caagentd バイナリ - 41

環境設定ファイル - 41

自動インストール - 18

接続 - 47

ディレクトリ - 41

ポート番号 - 45

ホストと信頼関係にあるユーザのアクセス - 46

ユーザの開始と停止のスクリプト - 45

cprocess - 45

D

Direct I/O

UNIX サポート - 50

概要 - 50

E

endaso AS/400 コマンド - 74

F

fs.cntl ファイル システム コントロール ファイル -
40

fssnap - 50

I

IP アドレス

UNIX および Linux の ACL - 55

L

libacl.so ACL ライブラリ - 57

Linux

32ビット ACL ライブラリ - 57

32 ビットの ACL ライブラリへのリンク - 58

ACL ライブラリ バージョンの検証 - 58

N

NetWare

ASCONFIG.INI - 38

CSLOADER.NLMCSLOADER.NLM - 71

NDS - 39

nwagent コマンド - 71

unload nwagent コマンド - 72

- オープン ファイル - 38
- クライアントエージェントの設定 - 37
- ネットワーク クライアント ファシリティ - 71
- パス名 - 38
- Novell ディレクトリ サービス (NDS) - 39
- nwagent.log NetWare ログ ファイル - 68
- nwagent コマンド - 71

O

- OpenVMS
 - bab\$shutdown.com コマンド - 74
 - bab\$startup.com コマンド - 74
 - show sys /proc=aso\$* コマンド - 74
 - TCP/IP スタックの最適化 - 62
 - 環境設定 - 61

P

- port.cfg
 - Common Agent - 45
 - UNIX と Linux の環境設定ファイルについて - 45
- PortsConfig.cfg 設定ファイル - 31
- print filename コマンド - 68

R

- Runtime Statistics - 65

S

- show sys /proc=aso\$* OpenVMS コマンド - 74
- single user モード - 55
- straso AS/400 コマンド - 74

U

- uag.cfg - 40
- uag.cntl ディレクトリ コントロール ファイル - 40
- uag.log アクティビティ ログ ファイル - 68
- uagentsetup スクリプト - 72
- uagent コマンド - 72
- UDP ポート、Common Agent - 45
- unload nwagent コマンド - 72

W

- Windows
 - IP アドレス - 31
 - ウイルス スキャンの実行 - 35

- サポートの共有 - 24
- システム状態のリストア - 24
- システム ハイブのリストア - 24
- パスワード セキュリティ - 26
- バックアップ エージェント管理 - 26
- プロセスの優先度 - 26
- ポート番号 - 31
- Windows のマネージャ インターフェース - 22

あ

- アクセス コントロール リスト (ACL)
 - UNIX および Linux - 55

- アクティビティ ログ
 - AS/400 のトレース レベル - 55
 - 概要 - 66
 - サンプル - 67
 - 表示 - 67

- インストール
 - ACL ライブラリ - 57
 - Client Agent for Windows - 17
- インストールに関する考慮事項

- NetWare - 15
- OpenVMS - 16
- Windows - 15

- ウイルス スキャン - 35
- エージェント ステータスの確認
 - OpenVMS - 74
 - UNIX および Linux - 72

か

- 環境設定
 - AS/400 - 58
 - NetWare クライアント エージェント - 37
 - OpenVMS - 61
 - UNIX および Linux クライアント エージェントの環境設定 - 40
 - Windows クライアント エージェント - 24
 - Windows セキュリティ オプション - 29
 - Windows ネットワーク通信 - 31
 - スナップショットおよび Direct I/O - 52

- 環境設定ファイル
 - agent.cfg - 45
 - caagperf.cfg - 50, 52
 - CAPortConfig.cfg - 31, 45
 - port.cfg - 45
 - PortsConfig.cfg - 31

- Solaris サンプル - 53
- 環境変数 (ENV) - 42
- クライアント エージェントの開始 - 70
- クライアント エージェントの追加
 - Windows サーバの手動操作 - 22
- クライアント エージェントの追加とオート ディスカバリ - 21
- クライアント エージェントの停止 - 70
- コマンド
 - \$>rm uag.log - 69
 - ABuagent/uagentsetup - 72
 - bab\$shutdown.com OpenVMS - 74
 - bab\$startup.com OpenVMS - 74
 - caagent - 45
 - endaso AS/400 - 74
 - nwagent - 71
 - straso AS/400 - 74
 - uagent status - 72
 - マウント - 50
 - ログを表示するファイル名をプリント - 68
- コンピュータの名前解決
 - プロトコルの選択 - 70

さ

- ジョブ パッケージ - 36
- スクリプト
 - agent.cfg ファイルを変更するための使用 - 73
 - uagentsetup - 72
- スナップショット
 - UNIX サポート - 50
 - 概要 - 50
 - 機能 - 50
 - 出力 - 50
 - バッファ - 50
- 制御ファイル - 40

た

- ディレクトリ コントロール ファイル - 40
- トレース レベル
 - AS/400 - 55
 - OpenVMS - 62

な

- ネットワーク インターフェース カード (NIC)
 - IP アドレス - 31

は

- パスワード、Windows - 33
- バックアップ エージェント管理 - 26
- ファイル システム コントロール ファイル - 40
- ブラウザ環境設定ファイル - 40
- プロトコル - 22
- ポート アドレスの環境設定 - 45
- ポート番号、Common Agent - 45
- ホーム ディレクトリ - 44
- ホストと信頼関係にあるユーザのアクセス - 46

や

- ユーザ アクセス、Common Agent - 46

ら

- ライブラリ レベルのバックアップ機能 - 59
- ログ ファイル
 - caagperf.log - 50
 - nwagent.log - 68
 - アクティビティ - 67
 - 削除 - 69